

Shogi literary magazine

駒.zone

vol.10

将棋タッグ短歌

2

駒・zoneガールズ

33

うたう将棋百物語

41

将棋詩

49

秘密の音楽庫

51

将棋短歌

61

香車とみかんゼリーとなつの日。

62

「駒・zone VOL 10」に寄せて〜ツクモさん、対談です！〜

67

あとがき

70

将棋タッグ短歌

しむしむさんの振り駒により、と金が三枚で玉チームの先手です。

先手

玉チーム

清水らくは・跳馬

後手

王チーム

浮島・堀まり慧



## 玉チーム

熟考が導き出した**歩**の一步ロボットアームも温かかった らくは

高跳びを仕留めた数を誇っても**歩**は王様を仕留められない らくは

床に落ちた時わかったんだ**歩**だって一所懸命拾ってもらえる らくは

目の前にあるものだけは傷つける恍惚にあるヤマアラシの**歩** らくは

**歩**と歩わり飛びたくなって盤を出るそして歩幸に歩るえることに らくは

さやか「それでは本日の解説者をご紹介します。

将棋短歌人結社・駒損同人の駒野尊徳さんです。

よろしく願います」

駒野「よろしく願います。本日は貴重な場にお招きいただいて

少し緊張しております(笑)

結社の新人の駒込さやかさんに聞き役をお任せして精一杯

解説してみたいと思います」

さやか「ご紹介に与りました駒込です。結社の中では歌歴は浅いですが

将棋の経験は駒野さんより豊富です」

駒野「ええ。むしろ私は、歌は長いけど将棋の経験があまりないんで

すよね」

さやか「そもそもなんで将棋短歌結社にお入りになったんですか？」

駒野「えー……正直な話をする『知り合いに頼まれたから』ですかね。

うちの結社の同じく同人の浮島さんに誘われて入りました」

さやか「主催の清水らくはさんともお知り合いなんでしたっけ？」

駒野「そーうーですね……多分。向こうは私の事を覚えてるかどうか

(苦笑)」

さやか「結社で影が薄いと気まずいですよねえ。自分だけ歌集とか送ら

れてこなかったりとか」

駒野「さりと恐ろしいこと言わないでください……。」

大丈夫……ですよ多分(おろおろ)ま、まあ始めましょう！」

さやか「はい。さて、今回は盤上の駒すべてを短歌にするという企画で

すが先手番の短歌はいかがでしょうか」

駒野「はい。まずは歩の短歌がならんでいますね。

作者は清水らくはさん。

らくはさんの歌風は私文学と俗に言われる短歌の中でも

『私性』がかなり希薄な歌を歌われるのが特徴だと思います」

さやか「私文学……ですか？」

駒野「ええ。一人称の文学、ともいうかな？」

歌の主語がなかったら作者と思え！とかいう人もいます」

さやか「なるほど」

駒野「でもそういう読み方していると彼の魅力は半減です。

ここは別の見方をしましょう。

たとえば一首目。電王手くんが主語ですねー」

さやか「電王手くんが主語なのはなんかタイムリーですね」

駒野「なんか萌えますよね。あのアームのメカメカしい感じとか。

歌としては、小さい点ですが助詞の「も」が効いてますね。

人間側の棋士の葛藤がさりげなく、たった一文字のなかに描かれて  
います。  
これはとてもいい詠み方ですね」

さやか「この助詞のむこうに対局が蘇りますね。歩の一步……。」

その時間に、機械の電王手くんが熱であたたかくなることがあったかもしれない。  
それを体温のように例えた所が、想像力がふくらみ面白い歌だ  
など思います」

駒野 「さすがだなあ。私は将棋のほうにはいまいち疎いので、駒込さんがいてくれると大分楽ができます（笑）」

さやか 「恐縮です」

駒野 「他にも第三首もなかなか見所がありますね」

さやか 「はい。『床に落ちた時わかったんだ歩だって一所懸命拾ってもらえらる』ですね？」

駒野 「そうそう。歩の擬人法なのか、それとも歩に感情移入している誰かがいるのか。

他の歌と比較してみるとおそらく前者でしょうね。

清水さんは駒をひとつのキャラクターとして捉えているんだと思います」

さやか 「なるほど……。ああ、そういうえば駒って落としたら結構必死に拾っちゃうかも」

駒野 「そうなんですか？ やっぱり失くしちゃうと大変ですもんねえ」

さやか 「椅子の下とか、場合によっては机の下とかに落ちちゃうと本当に必死です（笑）」

駒野 「ははは。そうですね。駒は拾ってもらえるのか……。…（遠い

目）

さやか 「主宰の清水さんの短歌に今日は切り込んだじゃいましたねえ。  
……駒野さんが同人から会員にランクダウンしても私は見捨てないですよ？」

駒野 「さりげなくえげつない未来を予測するのは止めてください（汗）  
結社で居場所がなくなります……」

さやか 「ところで他の歌との比較で、と先ほど仰ってましたが全体としてどうですか？」

駒野 「うーん、やっぱりなんというか駒と作者の距離感が出ている気がしますね」

さやか 「距離感……という」と

駒野 「たとえば『雪に傘、あはれむやみにあかるくて生きて負ふ苦をわれはうたがふ（小池光『バルサの翼』）』  
という歌があるんですが、以前雪国の人にこの歌を紹介したことがあったんですよ」

さやか 「拝見した印象ではとても美しい歌だと思いますが……」

駒野 「それがね、大不評だったんですよこれが」

さやか 「ええっ？」

駒野 「『雪国の人間に雪のジョークを言っても笑えない』とまでいわれましたね。

この歌の感性自体が冗談みたいなものだそうです」

さやか「ああ……雪国の雪は確かに」

駒野「これは極端な例ですが、このように言葉というものは距離やその

人間の立ち位置によつて微妙にニュアンスが異なるんですよ。

作者が将棋に詳しい分、将棋をやられる方に共感できるような部分が多いのではないかと感じますね」

さやか「なんだか住んでみたい田舎特集と田舎暮らしの現実のような話に……」

駒野「なに。住めば都です。人間関係以外は」

ぺちやくちやおしやべりをする**歩**兵ども時は来たのだ前に倣え 跳馬

**歩**損することをマイナス100点と換言すれば僕も電腦 跳馬

「**歩**はいつも只捨てられる駒である」でたらめ言つて得意げな君 跳馬

「ダンスの**歩**」洒落た名前をもらったが踊っているのは君だけなんだ 跳馬

さやか「それでは2ページ目、4首跳馬さんの短歌の解説を始めたいと思います」

駒野「こちら歩の歌ですね。先手側は跳馬さんが歩を少なく詠んでますね。

もしかしたら大駒を担当しているんでしょうか？なかなか目の離せない分担ですね」

さやか「駒野さんこちらの歌はどういう風な点に注目するといいいのでしょうか？」

駒野「そうですね……跳馬さんは歌歴が比較的まだ若い方なんですよね。いくなれば、若書きといった時期もあります」

さやか「若書きと言いますと……」

駒野「変な技術がついていない分、素直に詠みたい言葉がでてくる時期とでもいいますか詠みたいエネルギーだけで何とか形になっちゃうんですよ。書き始めのうちは」

さやか「書き始めてからしばらく経つとそうでもないのでしょうか？」

駒野「人によると思うんですが、技巧に凝りだすとはばらく詠めなくなったり凡作が増えたりしちゃうかもしれませんね。何事も継続が難しい」

さやか「技巧がつけばうまくなるのでは？」

駒野「読者の目を意識できるようになる分、伸びやかさが疎外されやす

いですからね。

ままならないものです。

ただ跳馬さんがそのパターンに陥るかどうかは私にはわかりません！

多分だいじょうぶ！」

さやか「えーと……（苦笑）」

駒野「いや、私にとっては黒歴史なんですよ……。短歌の技巧に凝り始めてやたら塚本邦雄にかぶれて……」

さやか「それは痛いですね……」

駒野「まあ、歌の方に行きましょう。

このページは……四首目の歌が目を引きますね。ダンスの歩？」

さやか「『ダンスの歩』洒落た名前をもらったが踊っているのは君だけなんだ』ですね」

駒野「ダンスの歩って何なんでしょう……（笑）」

さやか「ええと……歩を打ったり、成り捨てることによって敵金や銀を躍らせる手筋ですね」

駒野「はあ、なるほど。ということは歩が踊つてと言うよりは歩が躍らせているのですね」

さやか「そうかもしれません」

駒野「ある種ユーモアのある名前ですね。躍らせているというか、リー

ドしているのかな？

そういう風に読むと随分と不敵な感じがしますね。

ユーモアって難しいんですよ……。狙ってできるもんでもないし」

さやか「そういう意味ではこの手筋を命名した人はすごいですね……」

駒野「そう思います（笑） 他の歩の手筋もこんな名前なんですか？」

さやか「他には……合わせの歩、焦点の歩などの手筋がありますね」

駒野「うーん、となるとダンスだけ擬人法ですね。踊っている歩の滑稽

さがにじみ出ていると思います。

こういう単語というか固有名詞ってそれだけでインパクトが大きいですよ」

さやか「擬人法的な固有名詞というところでしょうか」

駒野「ええ。これはダメ押しでカギ括弧もついてますし、嫌でも目立ちますね」

さやか「でも、やっつてることは死の舞踏ですよね」

駒野「駒込さん、たとえばえげつないです（苦笑）」

さやか「殺意は笑顔に隠すものですかー！」

駒野「アツ、ハイ。……ええと、他には一首目も気になりますね！」

さやか「『ぺちやくちやくとおしゃべりをする歩兵ども時は来たのだ前に  
做え』ですね。

どんなところが注目すべき点でしょうか」

駒野「なんといっても命令形でしょうか。『前に做え』は緊張感がありますね」

さやか「将棋ということもあって戦とも印象がかぶりますね」

駒野「ええ。ただ命令形って簡単それでエネルギーがいるんですよ。

だって対象を自分の意にそわせようとするんだから。

前川佐美雄の『いますぐに君はこの街に放火せよその焰ひの何んとうつくしからむ』も命令形だけど、すごいエネルギーですよね」

さやか「これもまた凄まじい歌を例に出しましたね」

駒野「ゲバ文字とかで書くで一層きついですよー。まあ、命令形はね。

極論を言ってしまうえば対象に『詩になれ』と命令するようなものなんです」

さやか「詩になれ、ですか」

駒野「そう。随分乱暴な話ですが、その分詠み手の技量や切れ味も要求

される詠み方でもあります。

その点、ぺちやくちやくのオノマトペがどう受け取られるかが怖い  
ですね」

さやか「駒野さん、オノマトペとは何なんでしょう」

駒野「なんとなくで共有されている意味合いとしては擬声語・擬態語で  
しょうね。

『しんしんと雪ふりし夜にその指のあな冷たよと言ひて寄りしか

（斎藤茂吉）』

現代的な歌だともっと突飛なものもありますが、こういうもの  
です」

さやか「斎藤茂吉のこの歌では『しんしん』がそれにあたるのですね」

駒野「そうです。余談ですが『オノマトペはその作者の技量がすぐに出  
てしまう恐ろしさがある』

なんて私は過去に言われたことがありますね。個人的な話ですが」

さやか「べちやくちやであるとかかまらずい点があるのでしょいか？」

駒野「まずいという事はないのですが、やはり若干紋切表現の感がぬぐ  
えません。

個人的にはこの歌の上句のひらがなから下句の漢字に引き締まっ  
ていく所が非常に気に入っているんですがね」

さやか「緊張感がありますよね。時は今、という感じで」

駒野「おお、明智光秀ですか？」

さやか「ええ。将棋という知的なゲームとしての印象が強いですか」

そもそもは戦争のメタファーじゃないですか。だから作者とし  
てはその命の取り合いに似た真剣さを出したかったのではない  
でしょうか」

駒野「なるほど。それが自然と意識せずに漢字という硬質さに集束して  
いったのかもしれないですね」

さやか「はい。それでは最後にページ全体としての解説をお願いします」

駒野「わかりました。清水さんは歩のキャラクター性についての歌が多  
いのに対し、跳馬さんのは歩とプレイヤーの関係性が出ているよ  
うな感じがしますね。

『将棋を指す私』がいます。主人公は駒ではなく、私です」

さやか「たしかに」

駒野「たとえば3首目の歌なんか、歩が安っぽくみられてることにさえ  
ムツとしてる。

これなんかもう、愛車を馬鹿にされた時の感覚っぽく見えちゃう  
なあ。

アニメで例えるとガンダムみたいな」

さやか「ああ！ ちょっとそんな感じありますね。駒は確かに無機物だ  
けど指し手にとっては大切なパートナーでもあり武器でもあり  
ますし。

……寝返りますけどね」

駒野「怖っ！！ 明智といいなんか不穏ですよさつきから……。

まあそれはさておき、そう考えると私性も自然かなあ。この私性  
がこの後どのような形で展開していくのか。期待が高まりますね」

さやか「駒野さんのキャラが次ページからどんなふう崩壊していくの  
か、私も期待しています。

時は今！！」

駒野「やめてください（震え声）」

動き出す時を待ってる香車には横のことこそ重要だった らくは

飛車落ちの時に隠されたる飛車は何を思うて涙するのか 跳馬

ぴよんぴよんと跳ねてるうちはぴよんぴよんが殺意を隠す桂馬ちゃんだよ らくは

腰掛けて待ってる銀を裏切っていつでもねらうまた千日手 らくは

ほつといて時には無垢な状態で金の衣を干していたいの らくは

悪癖は十年ぶりでも変わらない玉をつかんだ先輩にらむ 跳馬

さやか「さて次のページですが……。浮いてますね桂馬ちゃんが（笑）」

駒野「目立ちますよねえ……」

さやか「なんとなく駒野ガールズのキャラクターがかぶりますが……」

駒野「私はどちらかというと金の娘が好みなのですが、欠片食器さんの小説にでてくるちよつとエキセントリックな桂馬ちゃんも好きですよ」

さやか「ああ……『銀ころりん』とか言っちゃう系の……」

駒野「ええ……っついていやいや、なんかちよつと残念な感じの子みたいないニュアンスになっちゃったじゃないですか！」

さやか「まあまあ（笑） 残念なのはむしろ技術評ばかりでふくらみがない駒野さんですよ」

駒野「それについては申し訳ないです……。えー、脱線しましたが歌の方に行きましょう……」

さやか「桂馬ちゃん残念説はともかくとして、桂馬は確かに意図が読みにくい動きをしますね」

駒野「ああ、やはりそうですか？」

さやか「ええ。上手い方を相手にすると桂馬が跳ねるのが凄く怖いです」

駒野「殺意を隠す、ですか。そう捉えるとかなり背筋が寒くなる歌です

ね。

……駒込さんは何か隠してたりは？」

さやか「いいえ？」

駒野「本当？」

さやか「もちろん嘘です。聞き役の無知さはフリです。他に注目したい短歌はありますか？」

駒野「恐ろしい子……。注目といえば、えー……他には五首目ですかね」

さやか「『悪癖は十年ぶりでも変わらない玉をつかんだ先輩にらむ』ですね」

駒野「ええ」

さやか「玉つかむ……王は基本的に強い方へ渡すのがマナーですが……」

駒野「ということは、へりくだり過ぎて慇懃無礼な悪癖ということでしょうか。

うーん、悩むけれど詠み手のほうが強いんですかね」

さやか「むしろ詠み手自身の先輩を睨む悪癖なのかもしれませんよ？」

駒野「ああ、そういう読み方もありますね。

10年ぶりに会った先輩に対して自分よりも弱い相手であっても、睨んでしまう」

さやか「読みがブレやすい歌い方ではありますがそのほうが自然かもし

れませんね」

駒野 「その読みだどだいぶ尖ってるなあ〜！（笑）

勝負とはそういうものなのかもしれないけれど、将棋の勝負の緊迫した空気を感じますね」

さやか 「技巧的にはどうでしょう？」

駒野 「えー、いや？ 特に問題はないと私は思いますよ。

たとえば上句と下句を入れ替えてみてください」

さやか 「えーと……『玉を手につかむ先輩にらむ目の悪癖かわらず十年

たつても』みたいな感じですかね」

駒野 「やりますね駒込さん。そうそう。こちらでも悪くはないのだけどもにらむという動詞が結句に来ないので、どちらかというところからかい詠みに感じませんか？」

さやか 「ああ、確かに。

年ぶりの再会を感じさせるような、苦笑交じりのあたたかみを感じます」

駒野 「うんうん。こういう風に上句と下句の順番って実はかなり大事で

それを違えると印象も変わってきちゃうんです。

この詠み手は『にらむ』を一番強調したいんだろうから、この順番がおそらくベストなんでしょう」

さやか 「なるほど……」

駒野 「ですが、やはり読み方によって意味が全然変わってきてしまうの

はずこし不親切かもしれせんね。

その不親切さ自体が味になっちゃうような……  
そういう歌風をめざすのならアリなのですが」

さやか 「斎藤斎藤さんみたいな感じですか？」

駒野 「えーと……ははは。まあ読み手によって印象が全然違う歌もある

と言う事で……」

さやか 「逃げましたね」

駒野 「ニゲテナイヨ？」

さやか 「そういう批評をきつちり言わないでお茶を濁すの、悪癖だと思

います」

駒野 「口は災いのもとなんですよ……。

たとえば

『「お客さん」「いえ、渡辺です」「渡辺さん、お箸とスプーン

おつけしますか」（斎藤斎藤）』

なんか、本当に歌の背景の描写が不親切で……」

さやか 「え？ いい歌だと思えますけど」

駒野 「そう？ とうかこれコンビニ？ こんなこといわないでしょー」

さやか 「わかってないなあ。だからいいのに」

駒野 「ええ〜？」

さやか「まあ次の歌に行きますか。そろそろ休憩ですけれど」

駒野「ああ、じゃあその前にといつてはなんですがこので読者の皆さんにも参加してもらいましょうか」

さやか「ああ、はい。恒例の『次の下句予想』ですね」

駒野「ええ。駒込さん説明お願いします」

さやか「『次の下句予想』のコーナーでは、作者の短歌1首の上句だけを發表してその短歌につける下句を予想するコーナーです。それでは駒野さん、今回の上句の發表をお願いします」

駒野「はい、ではいきますね。」

『すみっこにいるもんだから仕方ない』です。作者は跳馬さんです」

さやか「下の句の予想には正解はありません。みなさんもどんな下の句がつくか奮ってご参加ください」

駒野「……なんかこうあれですね。こういう企画があると例の『それにつけても金の欲しさよ』って答えたくくなりますよね（笑）」

さやか「ああ、どんな上句にでもついてしまうであろうという下の句です」

駒野「たいていどんなのでもくつつきますからね。」

『やは肌のあつき血汐にふれも見で』それにつけても金の欲しさよだとか『突風に生卵割れ、かっつかく』それにつけても金の欲しさよみたいなね」

さやか「え、あの……秀歌がだいなしじゃないですか……」

駒野「人間ねえ、金が欲しいんですよ誰だつて……」

さやか「うわあ……」

駒野「『すみっこにいるもんだから仕方ない』それにつけても金の欲しさよ……ほうらくつついた！」

さやか「なんか一気に窓際族的なニュアンスになってしまいましたね……」

駒野「自分で言っていて最低だなあ僕……（苦笑）」

真面目にいますとこのような何にでもついてしまう下句や下句がどんなものでも構わないような上句はあまりいい評価は受けにくいことが多いですね」

さやか「そういうものなんですか？」

駒野「ええ。一首としてのまとまりを欠くというか、たとえば上句だけで完結してしまうなら『なら俳句や川柳でいいじゃん』ってなってしまうんですよ。」

さやか「蛇足にとられてしまうんです」

さやか「なるほど」

駒野「なのである種の必然性というものが句と句の間には必要だったりもするんですがまあ例外もあるのであまり鵜呑みにはしないでくださいね。」

上句と下句をあえて断絶させる手法もあります」

さやか「そうなんですか。となるとこの上句『すみっこにいるもんだから仕方ない』も将棋の歌であるなら、必然的に詠まれる駒も限られてきますね」

駒野「この歌だと香車ですかね。『香車は時計をぼーっと見てる』とかでも入りそうです。駒達さんはどうですか？」

さやか「うーん……『ごめんね、動かすこともできない』とか？」

駒野「おおー、あえて香車という単語を削りますか。なかなかいいですね」

さやか「いえいえ」

駒野「まあ、将棋の短歌だという前提によりかかっていますか」

さやか「ええっ!? きびしいですよ駒野さん……」

駒野「フッフ……すべては読者が決めることです。

さてそれではこのページの解説は終わりにして一度休憩にはいりましょう」

さやか「再開は次のページで短歌が発表されてからです。おつかれさまでした」

駒野「おつかれさまでした」

「投げようか」刹那の思い振り払い明日のために金打ちつける 跳馬

いつの日か教えてもらった銀多伝もう指すことはないのだろうか 跳馬

息絶えた仲間を助けることもなく大空高く旅する桂馬 跳馬

「また僕を切ったね」冷たく笑ってる角は結局君を仕留める らくは

すみっこにいるもんだから仕方ない香車はいつもひとりぼっち 跳馬

さやか「はい。それでは休憩を終了し、再度解説に入りたいと思います」

駒野「よろしくおねがいします」

さやか「さて最後のページの解説ですが……先ほどの下の句予想の結果から発表しましょう」

駒野「正解？と聞いていいものではないですが、作品は『すみっこにいるもんだから仕方ない香車はいつもひとりぼっち』ですね」

さやか「ひとりぼっちですか……」

香車がみんなの輪に入っていけない、というのは珍しくないですがひとりぼっちの寂しさを香車が感じているというのとはなかなか面白い視点ですね」

駒野「すみっこなんてこんなもんですよ。歌会での評も可もなく不可もなく……」

なあなああの技術評だけ言われて『では作者はその点を参考にしてください』で次の詠草に評が移っていく……ははは……」

さやか「一途な分、香車のほうがまだ好感が持てますね。」

ところで駒野さん、さきほどの清水さんの香車の歌ともこの歌は重なりますがどのようなところに注意をむけるべきでしょうか」

駒野「うーん、そうですね。清水さんの歌は

『横のことこそ重要だった』と詠まれている通り、スタンバイしてても実際には横で修羅場が繰り広げられて、場合によっては詰んじゃってた……みたいな馬鹿っばさがあります」

さやか「じつと前を見ていて、見つめながら待ってたら戦局が傾いてた……」

なんとというか切ないですねえ」

駒野「同じ香車を扱っていても、いろんな性格の香車があるという点が面白いですね。」

私の香車なんて『ぼーっと時計みてる』（笑）」

さやか「……ダメリーマンな香車ですね。定時をじつと待ってる感じの」

駒野「定時で帰れるなら香車も苦労しませんがね。千日手でサビ残ったら帰れませんね」

さやか「なんて気の毒な！香車にそんな哀愁があつたなんて……！」

駒野「駒には36協定はありません。」

さて、次の歌ですが二首目が気になりますね」

さやか「はい。『いつの日か教えてもらった銀多伝もう指すことはないのだろうか』ですね」

駒野「……銀多伝？」

さやか「銀多伝は二枚落ちの相手、つまりハンデをもらっている相手に対して有効な定跡のひとつですね」

駒野「ははあ。つまりある一定レベルになってしまふとなかなか指す機会がないんですね？」

さやか「おっしゃるとおりです。なので『もう指すことはないのだろうか』と続くのでしょうか」

駒野「ノスタルジーだなあ」

さやか「むしろ短歌ではそういうのではないんですか？」

駒野「ええ〜……？ 短歌ですか……？」

うーん。たとえば指折りで音数を数えたりする癖とかはやらなくなるかなあ」

さやか「ああ〜！ 5・7・5・7・7みたいに指で数えますよね。初心

者の頃は」

駒野「ところがそうとも限らなくてですね（苦笑）」

結構大御所の先生でも咄嗟に詠む時なんかは教えてるの見たことあります。

たしかに確実なんですよこれ」

さやか「なるほど」

駒野「むしろこの場合、変に短歌と比較するよりも将棋独特の『ハンデをくれる背中がなくなつた』

いまの孤独感とか、乾いたさびしさみたいなものを感じたほうがいいかもしれないなあ」

さやか「いつになったら指折をやめられるのだろうか、だどちよつとダ

サイですもんね」

駒野「でしょう？ でもダサくてもやっちゃうね僕は。」

まあ他にも『銀多伝』の固有名詞がこの一首の場合すごく効いてますね」

さやか「固有名詞はポイント高いんですか？」

駒野「もちろん場合にはよりますが、この一首の固有名詞を試しになくしてみましようか。

『いつの日か教えてもらった定跡はもう指すこともないのだろうか』……どうでしょうか？」

さやか「えっと、まずどの定跡か混乱します。描写が限定されていない

せいか場面がわかりにくい。

それと銀多伝という言葉が持つ奥行き、たとえば初心者の頃の思いつきなどがあまりふくらまなくなってしまうね」

駒野「詠む方はともかく読者があまり奥まで入っていきなくなってしまうですよね。

このような場合にぎゅつと描写の範囲を限定する事でかえって奥行きを増すのが固有名詞の強みだったりします。

ボキャブラリー大事です。ホントに」

さやか「ただ定跡という名詞に置き換えたほうも、それはそれでドラマを感じます。

絶対的な意味での善し悪しは判断できかねますね。この場合」

駒野「そのバランス感覚が短歌のキモですねえ。

計算でやる人もいるだろうし、それこそ直観でやる人もいるでしょう」

さやか「計算でできるもんですか……？」

駒野「わかりません。」

一部の技巧派の方ならそつなくこなすでしょうが、その場合は意識してやると言うより息を吸って吐くくらいもう体に染みついているんでしょう」

さやか「真似できそうにないなあ……」

駒野「ただ固有名詞は読者がその単語を知っていないと効果がないという面倒もあります。」

使う場合にはそのことにも少し気を配ってもいいかもしれませんね」

さやか「先ほどの駒野さんみたいな場合もある、ということですね」

駒野「はい、まったくもって……。もう少し勉強しないとイケませんね」

さやか「ご精進を。さて、ひとまずこれで玉側のすべての駒の短歌がでそつたわけですが最後に全体を通しての評などはありますか？」

駒野「はい。まず玉チームはやはり駒を駒としてきちんと捉えていますね。」

場合によっては将棋短歌の駒って将棋盤の外へ飛び出しちゃう歌も多いんですが、この連作の中ではちゃんと盤の上にあります」

さやか「ああ、確かに」

駒野「題詠の場合、こういうテーマの素材をどこまで遠くへ飛ばせるかみたくなったりすることもあるので盤から飛び出していいのは一つのこのチームの特徴かな、と思いますよ」

さやか「盤から飛び出す、ですか」

駒野「ええ。特にうちの結社の浮島さん。」

あの人の歌なんて駒が盤から出まくってますよ」

さやか「駒野さんはどうなんですか？」

駒野「え？ それはまた次の機会に……」

さやか「本当ですね？ 次回を楽しみにしています。」

それでは本日の解説を終えたいと思います。  
駒野さん本日はありがとうございました」

駒野「こちらこそありがとうございました」

さやか「二日目は斉藤さんと副島さんが担当してくださいの予定です。  
読者の皆様はどうぞ二日目もお楽しみに」

## 王チーム

なんまいも歩をうめてきた川沿いの送電線の下の畑に 浮島

一歩ずつ前にすすめば青空がのしかかる日もきつと生きてる 浮島

夜はある鳥籠に歩をいれた日も焼けた火箸を突きいれた日も 浮島

牢屋から歌が途切れる朝にいて夥しい歩の絶える青空 浮島

夏の午後、湯船に水を張る人の背中をじっとみている歩たち 浮島

斉藤 「ええ、ええ、もう始まつてるんですか？ はい、今回はですね……」

副島 「あの先生、私が進行しますので」

斉藤 「ああ、はい、そうでしたね」

副島 「本日の解説者は斉藤将吉先生です。

結社アレレレご所属です」

斉藤 「ええ、よろしくお願いいたします」

副島 「そして私は将棋大好き！ 短歌大好き！ 将棋短歌大好き！ な

女優の副島玲美です。レイレイって呼ばれてます」

斉藤 「ほー、レイレイさんとおっしゃるんですね」

副島 「それではさっそく解説に入りたいと思います」

斉藤 「まあ、ですね。今回の企画で大変なのは歩の数が多いということ

で、まあ、どうやって色分けをするのか、そういうところに注目してみたいですね、はい」

副島 「では、見てみましょうか」

斉藤 「一首目から面白いですよ、歩を埋めてしまうという。

まあ、浮島さんは柔らかさの表現がうまいですよ」

副島 「柔らかさ、ですか」

斉藤 「ええ、普通は漢字だけどひらがなにする部分と、難解な漢字の部分にメリハリがあるんですよ。

『なんまいも』『うめてきた』ときて、『送電線』なわけです。

その中で駒は漢字ですから、メリハリを崩すものとして扱いに難しかったと思いますね、はい」

副島 「なるほど、勉強になります」

斉藤 「三首目ですね、鳥籠と火箸でしょ。

書けますか、この漢字」

副島 「いえ」

斉藤 「まあ、私は書けるんですけどもね。

まあなんにしても、硬さと柔らかさの中にふわっと将棋の駒があるわけですよ。

非常に安心しますよね、ええ」

副島 「言われてみればそんな気がします」

斉藤 「『夥しい』に至っては漢字で書くことはまずないですからね。

私もこっそり辞書で調べましたよ、はい」

副島 「でもこの歌、いい感じですよ」

斉藤 「浮島さんは将棋をほとんど指さないということですが、だから

こそいい意味で無理に温度を持ち込まないですね。

埋められて鳥籠に入れられて絶えてしまうわけですからね。

私ならかわいそうに思っってこういう歌は書けませんよ、ええ」

副島 「そういうものなんですね」

斉藤 「そして、最後にじっと見ているわけでしょう。歩の気持ちも考えているように感じます。

きっと、優しい人なんじゃないでしょうか」

副島 「なるほど」

斉藤 「ええと、ところで副島さんが気になった点などはどうですか」

副島 「やはり青空が二回出てきて、どうしようもなく大きな力のような何かとか、沢山の歩兵が一気に消えた空虚感のようなイメージを表していて、すごいなあ、と」

斉藤 「はあ、なるほどですね。

歩はいっぱいいるんですが、大きな力の前にはどうしようもないといったような、あきらめのようなものが描かれているとも感じますね」

副島 「でも、私歩が好きなんですよ」

斉藤 「うひょー、それはまた何で」

副島 「スペアがある感じがして、落ち着くっていうか」

斉藤 「なんかこう、優しいのか残酷なのかわからない答えですね。まあ、そういうのもありますね、ええ」

副島 「では続いて、堀まり慧さんの歌も見てみましょう」

眠られず棋譜を並べる棋士のゐて夜の底ひに歩を打たむとす 堀まり慧

盤上へ手を伸ばすごとさくら咲き人間将棋の歩兵はをんな 堀まり慧

郵便将棋

文月に歩兵を進めるそれだけの文をあなたに宛てて書きたい 堀まり慧

春の夜はかつて仕へし王のまへ打たれた歩兵のものがたりせむ 堀まり慧

副島 「それでは、堀さんの方の歌を見てみましょう」

斉藤 「ええ、ええ、まさに相矢倉といった雰囲気ですね」

副島 「相矢倉？ それはどういう意味ですか？」

斉藤 「矢倉は純文学と言いますからね、ええ。

聞いたことありませんか」

副島 「初耳です」

斉藤 「あれ、副島さん二段という風にお聞きしていますが、相当な実戦派ということでしょうか」

副島 「いえ、なんかテレビの企画でちよつと指したらいただけで」

斉藤 「はー、そういうこともありますか、ほー。

まああれですね、いろいろな二段がありますからね。

ちなみに私は小学二年生で五段でした、ええ」

副島 「さすがですねー」

斉藤 「その後も順調に強くなりましてですね、昭和五十三年二月四日にアマタイトル戦にて四勝一敗で……」

副島 「あの、短歌の方を」

斉藤 「ありやりやこりやりや、そうでしたね。

まず一首目ですが、『夜の底ひに歩を打たむとす』がこう艶があ

りますよね。

確かにですね、底歩って堅いんですよ。

ただこう、夜の底が堅いのかどうか。

桂馬や角の底歩は固くないですからね。

私にとっての夜がどういうものなのか、それによって意味合いが変わるといふ、深い歌だと思いました、はい」

副島 「はあ、そこまでは考えませんでした」

斉藤 「いえまあはい、考えなくとも感じられるのも大事なんですよ。

ただこう、考えてみると新しい可能性というのも見えてくるわけですよ」

副島 「二首目は、すごく鮮やかな光景が浮かんできました。

ただ、それだけの歌なのかなー、とちよつと考えてしまったんです」

斉藤 「ええ、ええ、わかりますよ」

副島 「桜の花が結局届かないような、戦わなければいけない女性という悲しいイメージもあつて」

斉藤 「対局者が恋人に例えられることはあつても、盤上は常に敵味方の

世界なんですね、ええ。

ですから人間将棋というのはこう、実は色艶からは離れた世界というものの悲しさもある気がしますね、はい」

副島 「なんか、物語を感じますね」

斉藤 「三首目などは郵便将棋ということで、まさに物語ですね、ええ」

副島 「なんか、歩の遅い歩みが、二人のゆっくりとした進展を思い起こさせて微笑ましいです」

斉藤 「はい、はい、そうですね。ただでさえ現代では手紙って『遅い』ものなんですよ。

その上に歩が一つしか進まないわけですからね。これはなんというか、『発見』したような歌ですよ、ええ」

副島 「発見、ですか」

斉藤 「こう、作り出すものと、ピタッとはまるものとあるわけですね。

もちろん単に思いつくとかではなくて、しっかりとした基礎があったものなんですけど、はい」

副島 「堀さんの歌からは、短歌の奥深さのようなものが感じられます。

ちなみに、歩全体からはどのように感じられましたか」

斉藤 「ええ、玄人の二人ですからね、非常に歩の特性をとらえていましたね。

これだけ同ジテーマの歌が続いて、それぞれがしっかりと独立して成り立っているというのも素晴らしいですね、はい」

副島 「ありがとうございます。それでは、いったん休憩にしましょうか」

斉藤 「あ、はい、え、昼食の注文ですか？ はい、手っ取り早く食べたいですからね、ここは特上寿司などが最善かと、ええ」

副島 「先生、そういうのは後で」

斉藤 「え、あ、はい。一旦締めるわけですね、はい、はい」

副島 「では、後半もお楽しみください」

鉄塔によりそう男、彼の名はけずりとられた**香車**と猫も 浮島

知らぬ間に店を畳みし碁盤屋に飾られたままの**飛車**の傾き 堀まり慧

夕暮れの**桂馬**を捨てる帰り道あしをもがれた着せ替え人形 浮島

リネン室の白いシートは死の上に**銀**はあかるい日差しの中に 浮島

また夏の炭酸水と青空に溺れた**金**が腐食する海 浮島

**王**さまは壊れたおもちゃ日曜日の絞首台まで包む太陽 浮島

斉藤 「ええ、ええ、大変お寿司は美味しかったですけれどもね、鰻も捨てがたいなと思ひまして、夕食は鰻にいたしましたしよろかかね、はい」

副島 「先生、食事の話はあとで」

斉藤 「あ、はい、短歌でしたね、わかっております。

ええ、なんととっても一首目、私は猫が大好きでした」

副島 「そうなんですか」

斉藤 「猫は大変かわいいですね。そして、猫と香車という組み合わせは驚くべきものでして。

浮島さんのクールさというものが可能にしているのでしょうか、はい」

副島 「クールさ、ですか」

斉藤 「猫も香車も守ろうとしていませんし、それでいいという感じですよね、ええ。

ま、私としましては猫は守ってほしいところなんです、それは個人の好みと言いますか」

副島 「私は狸が好きです」

斉藤 「ひょー、それは何でまた」

副島 「愛嬌があるじゃないですか。

あ、斉藤先生もちよっと似てますね」

斉藤 「ええ、ええ、たまに言われるんですよ」

副島 「ところで二首目の堀さんの歌なんです、これ、他の歌と少し違っていますよね」

斉藤 「ええ、ええ、確かにですね、見えているものをそのまま書いた、写真のような一首ですね。

どこを切り取るか、どのように切り取るかが勝負になるわけです。そして店をたんだ古い建物と、まっすぐでいられなくなった飛車がうまく調和している光景でして、一つの感情に対して非常に深みのある歌となっていますね」

副島 「深み、ですか」

斉藤 「そうなんです、こう、浅いところで勝負する歌というのもあるわけです。

たとえばですね、『大駒はホワイトソースの味がした』という上の句を思いついたとしましょう」

副島 「ちよっと想像が付きませんね」

斉藤 「ええ、ええ、そうでしょう。

でも、読者は立ち止まって何かしら想像するわけですね。別種のを組み合わせると、それだけで引掛かりができて、浅いところで歌のアクセントができるわけです。

ただ、これはもう、読者に依存するわけ、考えた結果どうでもいい歌だ、となってしまうって仕方ありません」

副島 「そんなものですか」

斉藤 「ええ、ええ。」

ですが深いところまでしつかりと書けば、表現したい対象に対して嘘偽りなく作者は責任が持てるわけです。堀さんはまっすぐに深さに向かえる強さというのがありますね、はい」

副島 「なるほど」

斉藤 「たとえば将棋でも棒銀が最も優秀なわけですが、間違えた時のリスクが大きいんです。

穴熊などはまあ何と言いますかね、相手の方が最善手を指し続けるのがつらいだろうと、委ねてしまっているところがあるんですね」

副島 「棒銀的な短歌と穴熊的な短歌があるわけですか」

斉藤 「ええ、なんといいですか、自分で言っていていい表現だなと思いましたが」

副島 「棒銀の話が出ましたが、浮島さんの銀の歌を読んで、銀という駒のイメージなんですが、明るいがどことなく孤独な寂しさを感じます」

斉藤 「まあ、あれですね、銀というのは守りにも攻めにも大事で、よく交換されて敵のものになったり、かと思えば金じゃないことを悔やまれたり、とても様々な状況に陥る駒なわけですよ、ええ」

副島 「はい。それに比べて金の歌は、不安ながらも何故か爽やかな感じを受けました」

斉藤 「金は裏もないですし、芯の強さもあるわけです。そしてですね、この歌の主役は海なんですよ。

海すらも腐食させるといふ金、実際には腐食はさせられない現実の海。

こういう二つの大きな力が一つの歌に入れられているわけですし、非常に、決まった！という感じの一首だと思いましたがね、ええ」

副島 「確かに、形として美しいですよ」

斉藤 「王の歌もですね、こう、出てくる単語がびったりしていると言いますかね、王将の大きさ、強さとその反対にある儚さ、運命の悲しさみたいなものが『太陽』で示されているわけですよ。いやあ、いいですね」

副島 「浮島さんの歌はロマンチックかと思いきや、鈍い棘が刺さったみたいな感じに思えるときがありますね」

斉藤 「ええ、ええ、なんといいですかね、曲者という感じですね」

副島 「ではここで、恒例の下の句予想のコーナーということにしましょう」

斉藤 「ああ、はい。はいはい、そうでしたね。今回は

『五段目の河飛び越えて敵陣へ』  
にしてみようかと思えます、はい」

副島 「すでに『敵陣』が将棋を思わせませんが、まだどんな駒かはわからない上の句ですね」

斉藤 「ええ、ただまあ、ヒントは隠されていますね。副島さんならどんな下の句をつけますか？」

副島 「そうですね、

『夜の香車にブレーキはない』

とかどうでしょう」

斉藤 「ほー、なかなかまつすぐな歌になりますね」

副島 「香車が好きなんです」

斉藤 「ええ、ええ、香車も棒銀には必要な駒ですからね」

副島 「では、しばらくの休憩のちに再開といたします」

逃げ道に待ち伏せをする水無瀬書の金には光る蛇の目があり 堀まり慧

敗北の予感はずよりやつて来る雁木の屋根に銀は降りつつ 堀まり慧

五段目の河飛び越えて敵陣へ急ぐ桂馬の揺れるたてがみ 堀まり慧

八十一マスの草原成りかへる馬は蹄のおと響かせて 堀まり慧

ひとひらの読みを千切りて捨ててゆき手のひら残りし花びらは香 堀まり慧

斉藤 「ええ、ええ、はい、まあここをこうしてああしてちょんちょんちよんと」

副島 「先生、何してるんですか？」

斉藤 「ああ、添削教室をしましてね、ちよつとどう直したらいいかと。はいはい、これはこうあれはそう……」

副島 「とりあえず、休憩時間は終わりということだ」

斉藤 「ああ、なんとなんと、はいはい、わかりました」

副島 「ところで下の句予想の正解なんですが」

斉藤 「ああ、はい、そうでしたね。正解というのもなんですけど、作品はこういうものでした。

『五段目の河飛び越えて敵陣へ急ぐ桂馬の揺れるたてがみ』

桂馬だったんですね」

副島 「爽やかですね。桂馬は実は馬なんだなあと思ひ出しました」

斉藤 「ええ、そうなんですよ。

そして馬の歌もあるわけですね。

馬の方はたくさん動けますから、堂々とした感じで、桂馬の方は跳ねることしかできませんから、颯爽とした感じで、どちらも駒の特徴がよく表れていますね、ええ」

副島 「そういえば一首目の『水瀬書』ってなんですか」

斉藤 「これはですね、駒の書体です。非常に伝統のある物でしてね、ファンも多いわけです」

副島 「書体にファンがいるんですか」

斉藤 「もちろんです、ええ。そして、金は確かに顔つぽいところがありますね。

逃げ延びてきた王将にとつて、目の前に金がいるのは絶望ですね」

副島 「なんだか勉強になります」

斉藤 「比喩表現にしても、堀さんの歌は光景を描くことに特徴がありますね。

私もですね、新しい発見をするために盤の反対側に立って局面を見ることがあるんですよ、ええ」

副島 「知ってます、『しょーきちアイ』ですね」

斉藤 「ほー、そういうことはご存じなの、はー」

副島 「はい。

それで、最後の歌なんですけど。

浮島さんは香車と猫だったんですが、堀さんは香車と花なんですね。

花びらと香の組み合わせは印象的です」

斉藤 「香車の中には『香る』という文字が入っていますから、やはりそのイメージが誘う言葉というものがありますね」

副島 「でも、花びらは手のひらに残ったんですね。

こう、受け止めたというか」

斉藤 「ええ、ええ、いい手というのはですね、見つけられても選ばれるとは限らないわけですよ。

ひらひらと落ちる中で、それが最善だということを受け止めきれるかどうか。

勝負師の葛藤をよく表していますね」

副島 「おお、斉藤先生、やはり勝負師なんですね」

斉藤 「ええ、私ですね、昭和五十三年二月四日にアマタイトル戦にて四勝一敗で……」

副島 「それでは先生、そろそろ総括をお願いいたします」

斉藤 「え、ええ、はい。やはりお二人とも歌に慣れていきますから、非常にメリハリが利いた作品が集まりましたからね。

安定感がある中で、しっかり個性を出してきています。

また、タッグということでお互いの作品を意識もしたと思うんですね。

それがいい緊張感につながったのではないのでしょうか」

副島 「ありがとうございます。

私もとても楽しかったですし、勉強になりました。

とりあえずは、将棋の方は駒の動かし方を間違えないレベルになりたいと思います」

斉藤 「うひょー、誰ですかそれで二段認定したのは。

いやはいろいろと不思議なことはありますね、それもまた面白いです。  
また次の企画を楽しみにしています」

副島 「はい、ではまたの機会まで、皆様さようなら」

# 駒・Zoneガールズ

駒・Zoneガールズ 第四章

「金は最後に」

欠片食器



イラスト 若葉

ぼおぼおぼおぼおぼお

朝から学校に、大きな音が鳴り響いていた。

「これは……」

木通は、周囲を見回し、そして上空に何かを見つけた。

「まあ、恒例のあれだね」

将は、小さくうなづく。

「恒例なんですか？」

校庭の上を、二台のヘリが飛んでいた。そしてそこからロープで、四角い台が吊るされていた。

「あ、金網デスマッチだあ」

後ろの方でびよんびよんと跳ねていた桂馬も、立ち止まって首を上方に向けた。

「金網……？ デスマッチ……？」

「意外とね、よくあることなんだよね」

「いい席とろー」

四角い台は校庭に卸され、どこからか現れた作業員が鉄柱やロープをセッティング始めた。そしてさらに二台のヘリが現れ、四角い金網をリングの上を下ろした。

校庭に、金網付きのリングが完成した。

校庭には続々と生徒が集まってきて、リングを取り囲んだ。将たちその輪に加わった。

「おー、久々にあれかあ」

「あれ、飛車ちゃん。仕事は？」

「細かいこと言うなよ、今日はフレックスタイム制ってことで」

「ふれつくすたいむってなんだー」

「神様から時間を前借りするんだよ」

飛車は、抱えてきたパイプ椅子を広げてどっかりとその場に腰かけた。

「ところで、何のイベントなんですか、これ」

「まあ、プロポーズといったところかね」

「プロポーズ？」

「強い男しか認められない世界があるんだよ」

どこからか現れたスーツの男たちが、ロープを張って二本の道を作った。そしてその一方から、ボクサーパンツの青年が歩いてきた。

「あー、石英だー」

「桂馬の知り合いか？」

「同じクラスう」

金網の扉が開けられ、青年はリングに入っていくた。

そしてもう一方の道からは、いつも通りのふわふわとした服に身を包んだお嬢様がやってきた。

「金さん！」

彼女がいつもと違うのは、傘を手にしていないところだ。両手には、

金色のオープンフィンガーグローブを装着していた。

「さて、今回は楽しませてくれるのかね」

リング上には向かい合う二人と、赤い服を着たレフェリー。

「先輩、約束通りチャンピオンになつてきました」

「あらあら、キックボクシングでしたっけ？ それで、お気持ちは変わらないんですか」

「はい。勝つたら、結婚してください」

二人のやり取りを聞いていた中で、木通だけがのけぞっていた。

「本当にプロポーズですか！」

「金ちゃんの家は、自分より強い人としか結婚できないんだ。だから付き合うのにも、こうして対戦しないとイケない」

「でも、金さん、武器が……」

「まあ、殺し合いではないし」

ゴングが鳴り、リング状の二人は一礼した。

石英は右足を一步ひき、拳を顎の下に構えた。それに対して金は、両手をぶらりと下げて前後に揺れていた。

「行きます」

石英が拳を打ち込んでいくが、金は頭を振ってそれを避け、右回りに動いて距離をとった。蹴りも繰り出されるが、金はするりするりと避け続けた。

「お姉さま！」

「あ、歩ちゃんだー」

歩は腕を振り回しながら、リングサイドで声を出していた。

「歩ちゃんは金ちゃんがloveだからなあ」

飛車はいつの間にかサイダーの瓶を手にしていた。中身は半分なくなっている。

「金さんは、武器なしでも強いんですか」

目を丸くしている木通は、将に尋ねた。

「なんでも、お嬢様のたしなみとして様々な格闘技を習わされたんだった。空手、テコンドー、カポイエラ、セパタクロー」

「最後は球技のような……」

リングの方では、石英はやみくもに手を出すのをやめ、じりじりと間合いを詰めていった。金は、目を細めて唇の端を上げた。

「もう、いいかしら？」

金は、態勢を低くしてから右膝を突き上げた。石英はガードしようとして両腕を構えたが、金は開いた両脇から腕をねじ込んで、左腕で喉を圧迫し、右手で後ろから石英の右腕をつかんでスリーパーのような形に極めてしまった。

「ヴッ」

「キックボクシングでは反則だったかしら。でも、今は何をしても逃れた方がよろしくてよ」

石英はもがきながら、尻餅をついて何とか技を解いた。ただ、ガードが開いたときに金の回し蹴りがこめかみを打ち抜いた。

「まだやれるでしょう」

「も、もちろんっ」

石英はよろよろと立ち上がったが、ファイティングポーズをとるのがやっとの状態だった。

「残念ながら、一撃の力は殿方には及びませんものね。まあ、飛車さんは別ですが」

金は、一気に間合いを詰めていった。カウンターの膝を合わせようとした石英だったが、その攻撃は虚しく空振りする。金が、跳躍していたのだ。

「ただ、私身軽ですよ」

空中で金の両足が石英の首に絡みつき、そのままの勢いで体をリングにたたきつけた。首四の字で締めつけられた石英にできることは、一つだけだった。

タップである。

「うう……」

「以前よりは長くかかりましたかしら。でも、まだまだですわ」

金は四方に一礼すると、リングを下りた。

「お姉さま、すごいです！」

「たいしたことはないですわ。それに私、本当は知的な方が好きですの」  
歩がはしゃぐ横を、金は颯爽と通り過ぎていく。リングを撒収するために、再びヘリが旋回し始めていた。

「何度来てもすごいなあ」

将は、目の前にそびえたつ豪邸を見上げながら息を吐いた。

「ほんとにっ」

その隣にいるのは、歩。

二人は並んで、大理石の道を進んでいった。丁寧に剪定された木々の間を抜け、しばらく歩いてようやく玄關である。

「お待ちしておりましたわ」

くると傘を回しながら、金は外で待っていた。

「いやあ、ここまで来るのに疲れたよ」

「そういう目的もあるようですわ。さあ、お入りになって」

重厚な扉が開かれ、二人は金の家へと招き入れられた。エントランスだけでも普通の家ぐらいの広さがあり、壁には古めかしい絵画が何枚も架けられていた。

「こちらへ」

金に導かれるままに、二人は階段を下って行った。照明は薄暗く、壁もコンクリートの打ちっぱなしで、豪華絢爛さは全く感じられなくなっていた。

「ここは……」

「おじい様が作った実験室ですわ」

「実験室」

地下五階までやってきて、金庫のようなものしい扉が現れた。金はカードキーを入れた後に番号を打ち込み、がたん、と音を立てて扉が開いた。

「入ってくださいな」

「わっ、なんだろう、変な感じ」

歩は、思わず身震いした。金がスイッチを入れると、部屋に明かりが灯った。そこは真っ白い壁のただっ広い部屋だった。

「さすが歩ちゃん、勘がいいわね」

「お姉さま、この部屋は？」

「おじい様が作り出した、『外の部屋』ですわ」

将は、壁に手を当てながら何度もうなずいた。

「やはりそうか」

「え、え、どういふことっ」

「プロフオンドウムの時と同じ感じだ。ここは、隔離されているんだね」

「そういうことですわ」

金は、歩に向けて傘を突き出した。

「おじい様は我が家に残っていた資料から、この星の歴史を読み解いた

んですの。そして悪魔たちの存在、駒ゾーンの在り方、そういうものを突き止めたんですわ」

「そして、この部屋を作った」

「そう、駒ゾーンに伝わる治癒力を隔離させることに成功したんですの。動物実験の記録などが残っていますわ」

「金ちゃんはそのことを知っていたのか」

「ある程度。でも、まじめに資料に目を通したのは使い魔が現れてからですわ。そんなに重要なものだと思うっていなかったから」

「そうか……今ここは、本来の地球の姿になつていっているということだ」

「そう言えますわね。そして、この部屋からこんなものも発見されたんですの」

そう言つて、金は懐から小さな灰色の羽を取り出した。

「それは！」

「え、なにになにっ」

「これが何なのか、私の父はわからなかったんですの。何せ、悪魔の存在を知らなかったんですから」

歩は目を丸くして、その羽を見つめた。将は、腕組みをして斜め上を見上げた。

「ここは完全に隔離されている。そこに羽があるってことは……」

「ご明察です。私たちは、ある程度なら空間を越えられるのです」

「わっ」

三人のいるのとは反対側に、人影が現れていた。灰色の翼と、灰色の髪、そして灰色の髭を有した老人。

「タイムリングが良すぎますわ」

金は、体を反転させて傘を斜めに構えた。

「もちろん、ずっと見張っていたのですよ。いつか、あなたたちが現れると信じて。ああ、私の名は翁猪<sup>おんじう</sup>。お察しの通り、クラウンシールドの一人です」

歩は鉤爪を装着し、体勢を低くした。翁猪は、だらんと両手を下げたままだった。

「私は金ですわ。この家の主ですの」

「そして、櫻翔<sup>おんしょう</sup>たちを倒した駒ガールズの一人ですわ」

「そうですわ」

「私も、倒されませんか」

「もちろんですわ」

金の長い脚が、床を蹴った。まっすぐに傘を突き出していった。しかし、それは受け止められてしまった。翁猪はただ両手で円を作っていただけだったが、空気が壁のようになって傘は受け止められていた。

「Artisan Shieldと呼ばれています」

「Artisan ……熟練工……」

つぶやく将の横から、歩も飛び出していった。右腕を伸ばして、突っ込んでいく。

「突き歩！」

傘を受け止めているため、翁猪は両手が塞がっている。歩は、攻撃が届くと確信していた。しかし、鉤爪は空気に阻まれて前に進むことができなくなった。

「なんでっ」

「人間にはないものが、あるんですよ」

翁猪の翼が、大きく広がって円を描いていた。

「そんなっ」

「その方も攻撃してきたら厄介ですが、どうやら武器はお持ちではないようだ」

「確かに僕はコマンダーだ。だから、攻撃はできない」

「なるほど。短期間に二人もやられてしまうのは不思議だったのですが、今度の駒ガールズには優秀なコマンダーがいるのですね」

翁猪が一步前進すると、空気に押されて金と歩は弾き飛ばされた。

「後退しても構わないんですよ。殺すのもいないのも一緒ですから」

「もう少し頑張らせていただきますわ」

「私もっ」

金は、身かがめて傘を開いた。翁猪からは、彼女の姿が見えなくな

る。

「無駄ですよ」

翁猪は、両手の円をひねった。空気がねじれ、傘を跳ね飛ばす。

「金開きが封じられたな……」

将は、歩の方に視線を動かした。計画が狂い、立ち尽くしているのを見えた。

「歩ちゃん、ひも歩！」

将の声に、歩の体が反応した。転がる傘を拾い上げ、くるくると回しながら前進していく。翁猪が手の円を前に突き出すと、再び傘は弾き飛ばされた。しかし、そこに歩の姿はなかった。

「こつちだ！」

歩の体が、ふわりと宙を舞っていた。

「もちろん予想済みです」

翼がぐっと丸くなり、空気の塊が歩の体を押し戻した。地面にたたきつけられる、小さな体。

「もらいましたわ」

傘から飛び出したのは、歩だけではなかった。一呼吸おいて、金が現れ、右腕を伸ばしていく。視線は対応できた翁猪だったが、体は完全に追いつかなかった。

「武器なしならば、と思っただんですがね」

翁猪の右頬から、鮮血がしたり落ちていた。金のはめていた、鉤爪が付けた傷。

そして金の方は、腹部を押さえてうずくまる。遅れながらも、翁猪の膝が刺さったのだ。

「お姉さま！」

「大丈夫ですわ」

歩は傘を拾い、次の攻撃へと態勢を作った。だが、翁猪は両手で円を作るのをやめ、翼も折りたたんでしまった。

「武器交換は予測できませんでした。これもコマンダーのおかげでしょう。ただまあ、致命傷を与えられないのは慣れていないということでは

しょう」

「今までの奴らとは違うな……」

将は、次なる作戦を考えたが、苦戦を予想して小刻みに地面を蹴った。

「しかし、実力は確かにあります。櫻翔と亀渥きよわのことも偶然ではないわけですね、あなたたちになら、任せられるかもしれません」

「何の話ですか」

「私たちと、休戦協定を結んでほしいんです」

金と歩は、言葉を失った。将だけが、鋭い眼光で翁猪を見つめていた。

「それは、あなたの良心から、ということだろうか」

「人間の感覚で言えばそうなのかもしれないね。でも考えてみてください。あなたが欲しいのは死んだ後の魂です。持ちつ持たれつ、いい関係ではないですか。わざわざ争って血を流す必要はない」

将は、喉の奥で笑った。それを見て、翁猪が初めて顔をしかめた。

「何がおかしいんです」

「かつてこの星には、七十億人の人間がいたとわかった。それが今は数十万人まで減ってしまった。他のゾーンもあるかもしれないけど、それでもおそらく一億にはいかない。魂を必要とする悪魔が、なぜそんな状態してしまったのか？ しかも最近、僕たちの寿命が短くなっている」

「……」

「そして先日、発電所を見て気付かされた。ほとんど、手が加えられていない。おそらく昔人間が使っていたものを、何とか利用しているといった感じだ。これは何を意味するのか」

「何を意味すると思えますか」

「クラウン・シールドと呼ばれる悪魔は皆強い。そして使い魔はもともと人間だったという。つまり……強い悪魔だけがこの星に来た」

「ほう」

「考えてみただけです。何か理由があつて、ある土地を脱出するとき。乗り物には七つしか席がない。本来なら運転手、医者、技術者、料理人などが需要だが、それでは席が余らない。命が助かるためなら、強いもの

が奪い取って、とにかく発進してしまう。おそらくは、いくつかの乗り物がそうやって奪い取られて、専門家がいないために失敗してしまった。けれども運よく、新しい土地にたどり着けたとしたら」

「面白い考え方ですね」

「ありがとうございます。続きだけど、そこで食料を見つけたら、とりあえず食べるでしょう。けれども、どれぐらい食べたらいいかは検討を誤るかもしれない。それでも、そういう人たちならまず腹を満たすはず。そして、足りなくなつてから気づくでしょう、このままではこの星でも生きられない、と。そこで育てることを試し始める。この……駒ゾーンのような感じで」

「やはり、優秀なコマンドーの存在は大きいですね」

翁猪は、ひげをなでて、右手を差し出した。

「あなた方は、やはりこれまでの方とは異なる。敵に回すのは得策ではないですね」

「どういうことだ」

「こういうのはどうでしょうか。残りの四人の弱点をお教えします。私一人になれば、人間の負担も減ります」

「仲間を売るのか」

「彼らは私の中で再生の時を待ちます。その間に、新しい宇宙船を作つてほしいのです」

将は、何度か瞬きをして、そして一度小さくうなずいた。

「この星はもう限界だという自覚があるわけだ」

「はい。私たちは元々これほど肉体に負担のかかる土地では暮らせない身なんです。私は、反対だった。けれども仲間たちは、これ以上の旅を続ける覚悟がなかったのです」

金と歩は、将の顔を見つめていた。二人とも、口を開くつもりはないようだった。

「しかし、一人になったあなたならば、こちらが有利だけだ」

「むろん、それは信用問題です。ただ、この提案を飲んでいただけじゃないなら……全力で、お三方を葬ります」

翁猪は、両手の円を大きくして微笑んだ。

「わかりました。こちらとしても、今あなたと戦うのは得策ではない。そちらに戦う意志がないのであれば、それに従うとします」

「やはり、賢いお方だ」

「困るな、勝手なことをされては」

新たな声は、上方から聞こえてきた。翁猪の真上、天井に蝙蝠のように張り付いている男がいた。ただし、翼は真っ赤で、肌の色はカスタードクリームのように黄色かった。

「謳<sup>おうぎ</sup>牙さん」

「あなたと寄<sup>よ</sup>勢<sup>せい</sup>とは違って、俺はワープが苦手なんだよ。来るのに苦労したぜえ」

謳<sup>おうぎ</sup>牙と呼ばれた悪魔は、喉の奥で引き笑いを鳴らした。

「あなたは、肉体への依存度が高いですからね」

「まあね。しかし、圧倒的有利な状況で俺らを裏切るとはね。まあ、あなたは最初からその気配があつたが」

「有利な状況ではないですよ。このままでは私たちは滅びます」

「で、自分だけ助かるうってのかい。まあ、そもそも俺たちはそんな娘どもには倒されなれないが」

謳<sup>おうぎ</sup>牙は天上を蹴つて、まっすぐに歩へと突っ込んでいった。歩は咄嗟のことに、体が全く反応しない。

「歩ちゃん！」

将は、ただ見守ることしかできない。金が傘を開いて歩を守ろうとしたが、二歩、距離が足りなかった。

謳<sup>おうぎ</sup>牙の手には、いくつもの刃が付いた輪、圈が握られていた。

「さあ、俺の美技を謳<sup>おうぎ</sup>うがいいわ！」

「させません」

刃先が歩に届こうかという瞬間、空気の球が膨らんで謳<sup>おうぎ</sup>牙の体を弾き飛ばした。謳<sup>おうぎ</sup>牙は翼をはためかせて、なんとか床に体を打ち付けずに済んだ。

「おいおい、俺にも手を出すのか」

謳冴と翁猪、二人の悪魔は真正面から対峙した。その間に将は歩のものと駆け寄り、鉤爪に工具をあてた。

「どうしたらいいんですの？」

「おそらくどちらにも、駒ガールズ二人では勝ち目は薄い。まずは身の安全を確保しないと」

「わかりましたわ」

「歩ちゃん、足は大丈夫かい」

「うん」

「この部屋を出れば追ってこれないはずだ。だから、まずは扉までの道を……」

そう言っただけ振り返った将は、視線の先に絶望を見た。

「あ、あれはっ」

「寄勢。プロフオンドウムで会った悪魔だ」

黒く大きな翼が揺れていた。2メートル近い長軀に、筋肉の張り裂けそうな腕。

「翁猪、やはりこうなっちゃいましたか」

寄勢は、謳冴の横まで来ると、その肩に手を当てた。

「はっはっは、こうなっちゃあさすがの翁猪さんもギブなんじゃないの」

「そうですね、あなたたち二人を相手にするのは大変困難だ」

「油断してはいけません。二人の駒娘もいる」

将は、悪魔たちと仲間を交互に確認した。どうすればいいのか。どの選択が一番冴えているのか。

「寄勢さんも、このまま滅びる道を選ぶのですか」

「滅びはしないで。可能性はあります」

寄勢は、力強く走り一気に翁猪との間合いを詰めた。翁猪は手で円を作り防御を固めたが、翁猪の拳は空気の塊を突き破って翁猪の肩を叩いた。翁猪は、膝をついた。

「俺がいなければ守りきれたんだらうなあ！」

上から、謳冴の攻撃も。翼を丸くして対応した謳冴だったが、完全には防ぎきれず圏の刃先が頬に傷をつけた。

「今なら間に合います。一緒に駒ガールズたちを討ちましょう」

「断ります。信念は、大事ですよ」

再び、二人の悪魔の攻撃が、翁猪へと向かっていった。翁猪は胸の前に両腕で大きく円を作り、体を後ろに逸らした。

「不本意ですが、これが私の決意です」

「まさか！」

将は、天井を見て叫んだ。金は傘を最大限に開き、三人の体を覆い隠した。

「どこを狙ってやがる！」

今度は、二人の攻撃が的確に翁猪の体をとらえた。翁猪の体は、十メートル近く吹っ飛ばされた。

「これぐらいでは魂には至ってないでしょう、ただ、次の一撃でそれも砕かれるわけです」

寄勢は倒れている翁猪へと歩み寄っていきこうとしたが、急に顔をひきつけて翼で体を覆った。

「え、なににな」

それを見た謳冴はきよろきよろと辺りを見回し、そして上を見たときに目を丸くした。天井が崩れて、落ちてきたのである。

悪魔たちの上に、天井の欠片が次々に降り注いだ。

「いてててて！ ふざけんな！」

謳冴もなんとか翼で身を守り、羽を何枚か散らすだけで済んだ。

「こんな攻撃、俺たちに……ん？」

「逃げますよ、謳冴」

寄勢は翼を何度か揺らし、宙に浮いた。体の色が薄くなっていき、そして、消えてしまった。

「ちよ、え、傷が消えねえ……体も重い……まさか……」

「装置が壊れましたわ」

ぽっかりと穴の開いた天井を見上げながら、金はずぶやいた。

「つまり、ここは駒ゾーンになったと」

「そういうことになりますわ」

「やばいやばい、早く行かないと、俺はワープが苦手なんだ……え」

体の動きが緩慢になり、うろたえる謳冴は、違和感に気が付いて振り向いた。そこには、小さな少女がいた。彼女の腕の先についた鉤爪が、謳冴の腹を貫いていた。

「おいおい、この状況で重傷は……」

「とどめを刺しますわ」

今度は前から、金の傘が謳冴の胸を貫いた。

「ふざけんな、それじゃなくても絶望だつてのに……」

謳冴の体は、崩れた。文字通り、砂のようにばらばらになって、形を失ってしまったのである。

「私たちは悪魔は……肉体治癒の力が裏目に出てしまうんですよ。肉体を……魂で制御しきれなくなるんです……」

がれきの中から、翁猪はよろよろと立ち上がった。

「すみません、あなたのおかげで僕たちは助かった」

「いやいや、私のせいで危険な目に合わせてしまった。それにしても、謳冴にとどめまで指すとは想定外でした。やはり、あなたたちは特別です」

三人が見つめる中、翁猪の傷が、ゆっくりと消えていった。

「なんであなたは……」

「私の周りに、空気を貼りつかせておいたんです。装置が生きている間の空気を」

「そんなことかできるのか」

「とはいえ長くは持ちません。そろそろ帰らせてもらいます」

「外の世界に戻ってどうするんですの。残りのクラウンシールドを敵に回すことになったんでは？」

「そうは言ってもここにはいられませんからね。あと、次お会いするときは敵になっているかもしれないのでお気をつけて」

翁猪の姿がだんだん薄くなって行って、そして、消えた。三人は、しばらくの間翁猪がいた場所のことを眺めていた。

屋上のベンチに、二人の少女が腰掛けていた。

「金ちゃんから相談は、珍しい」

「学びの必要性を感じたんですわ」

角は、前を向いたまま目を横に向けた。

「先日の、ことで？」

「そうですね。寄勢に勝てる気がしませんでしたの」

「うん、強い」

「でも私、なんとなく思うんですの。この戦いの最後は、私が決めるんじゃないかって」

「金は最後に、ということ」

「そうですね。ですから、もつともつと強くなりたいんですの」

「そうしたら、一生結婚、できないかも」

金は目を細くして、笑った。

「元の世界に戻ったら、私も普通の女の子になりますわ。そもそも私、知的な男性が好みですの」

角は、少しだけくすりと笑った。

# うたう将棋百物語

贅楽夢斗落波

## 1. 視線

将棋を指していると背後からじつと見られているような感覚におそわれることがある。

私は小さい頃から一人でお風呂に入るのが怖くて、中学三年の女子だというのに今でもお風呂は父と一緒に。なぜ一人が怖いかと言えば、小学生の頃、髪を洗ってシャワーで流しているときに背後に人の視線を感じたことがあるからだ。そしてなぜ年頃の女の子なのに一緒に入るのが男親なのかと言えば他に家族がいないからだ。私が物心つくずっと前から我が家は父一人娘一人の父子家庭だった。母親は随分昔から行方不明らしいのだが、詳しいことは判らないままだ。

お風呂で私の背後に立っていた視線の主は髪の長い美しい女性のものであった。もちろん私にはその姿は見えていなかった。そういう気がした、というだけのことなのだけれど、それでも何者かがそこにいることだけは確信があった。

後ろからジトジトと絡みついてくるような視線のあのイヤな感じ。きつと何者かが後ろに立っている。もし振り返ってソレを視たりしたら、一瞬で正気を失ってしまいそうな予感。恐怖のあまり体中の血液が全て干あがってしまいそうになる絶望感。

局面は中盤の難所だった。自宅から二駅ほど離れた場所にある将棋道場。相手は、この席主の娘なのだという、鴉の羽根のように真っ黒なセーラー服を身につけた、長くつややかな黒髪の美しい人だった。大人びて見えるが、高校三年生なのだという。私はその人を「お姉さま」と呼んでいる。というか、そう呼ぶことを本人から強く推奨されている。

「お姉さま」と呼べば席料をタダにしてくれるという条件だったし、私にも確かにその人への憧れのような感情があったので、ごく自然にそういう呼び方に落ち着いていた。

お姉さまと指して五局指す間に一勝できれば初段認定されるといのが、この道場の有段認定規定である。

将棋は居飛車対振り飛車の対抗形で、私の四間飛車（藤井システムや角道オーブン型ではない、昔ながらの伝統的な定跡形の四間飛車である）にお姉さまが棒銀、という実にクラシカルな戦型だ。

居飛車が仕掛け、振り飛車が角交換から大駒を捌き、互いに大駒を打ち合う。駒を補充し自陣に手を入れ、寄せの構想を伺う。いよいよ大詰めだ。その時。

——背後に、何者かが立っていた。

小さい頃、お風呂で感じたのと同種の気配。次の一手を考慮しているこの時に、今にも私の首に手を回してくるんじゃないか、とか。

大きな刃物——斧とか鉈とか、そういったモノを抱え上げていて、私が後ろを見た瞬間に振り下ろそうと、恐ろしい形相で待ち構えているんじゃないか、とか。

たった今、お姉さまが▲9五歩と端攻めを開始したところだ。△同歩と応じるか、あるいは手抜いて攻め合うのか。勝敗に直結する大事な岐路だ。でも、背中の視線が気になって読みに集中できない。

（そう言えば、あの時私はどうしたんだっけ？）

あの日、まだ小さかった頃、自分一人でも出来る気になって初めて一人でお風呂に入った時。背中で気配を感じたあの時。

意識が散漫したまま、私は△同歩と応じ、以下、端と下段飛車の効きを絡めた攻めを凌げずに、気が付けば少し前まで綺麗な姿をしていた後手の美濃囲いは見るも無残に崩壊していた。お姉さまに自陣を陵辱されている間中、何者かはずっと私の背後に立ち続けていた。

「参りました」

投了し一礼する。顔をあげると、お姉さまが妖艶としか形容しようの

ない、仄暗い微笑みを浮かべていた。

いつの間にか背後の気配はなくなっている。  
(……そうだ)

唐突に記憶がフラッシュバックする。初めて一人でお風呂に入ったあの時。あの日まで、我が家には美しい大人の女性がいて、私たちと一緒に暮らしていたはずだ。……あの人は、一体誰だったのだろう？

それから後も、対局中に背中からの視線を感じることは時々あって、そのたびごとに、私はあの女性の記憶を少しずつ取り戻していき、そして——戦慄を覚えるのだった。

視線には魔力があるというけれど魔力こそが視線になるの 落波

## 2. 手駒

持ち駒を握りしめてしまう癖がどうしても抜けない。

俺が親父に将棋を教わったのは十歳になるかならないかの頃だったように思う。親父はいわゆる日雇い労働者で、いつも日本のどこかで何だかよく判らない労働に身をやつしていた。家にいることはめったにないが、帰ってくれば朝から晩まで二人で将棋を指しまくる、ということが昨年の夏に親父が死ぬまで続いていた。この親父が持ち駒を駒台や盤の脇に置かず手に握りしめる癖があったため、俺にもそれが染み付いてしまったのだ。最近はかなり治ってきたものの、局面が白熱するついでその悪癖が顔を覗かせ、対局相手にかなり嫌がられたりするし、ひどく罵倒されたりすることもあった。

高校を卒業して地元の小さなパン工場に何とか就職できた俺は、休み

の日になると近くの道場で将棋を指して一日を潰す。この道場には、唯一、俺の癖に対して何も言わない人物がいた。今、将棋盤を挟んで俺の前に座っている、道場の席主の娘である。長い黒髪でいつもセーラー服を着ている。女子高生なのだろうが、俺よりも大人びて見える。切れ長の目。薄い唇。透き通るように白い肌。空恐ろしくなるほどに艶っぽいのだ。この娘と指して五局指す間に一勝できれば初段認定されるというのがこの規定で、この将棋は俺の二連敗後の三局目である。戦型は相矢倉の脇システムから、先手の俺が角交換後に銀を繰り出して先攻し、席主の娘がそれを凌ぎながら反撃の機会を伺う、という状況だった。

局面が進むにつれて無意識のうちに例の癖が出ていた。手駒。それを包み込む手からにじみ出る汗。気持ち悪い。今、俺の手駒は何だ？ぬるりとした感覚。軟体動物の死骸でも握りしめているような感触が掌からせり上がってくる。——気色悪い、と感じながら、俺は親父の最期の日のことを想っていた。

親父が死んだのは、工事現場での事故が原因だった。組んでいた鉄筋が崩れ落ちたのだという。下敷きになった親父は、体中のあちこちが破損していた。打ち所も悪く、病院に運び込まれる前に、救急車の中で息を引き取っていたらしい。遺品の中には、真新しい未開封の高級な漆塗りの将棋の駒が一セット遺されていた。親父の死んだ日は、俺の誕生日の前日だったのだ。

「手駒を握る癖は、そろそろ止めてもらおうかと思っている」

唐突に、席主の娘がそう言った。やはり気にはしていたのか。表情を伺うと何となく怒っているようにも見える。怒った顔も超絶に色っぽいのだが。

「すみません、つい癖で。やはりマナー違反ですよね」

「駒にカビが生えた」

「え？」

「お主がいつも握りしめるので、駒の一つにカビが生えていた。ちゃんと拭き取って、よく乾燥させてから箱にしまうべきだった……」

「……………ちつ……………」  
物凄く悔しそうだった。

「す、すみません！べ、弁償した方が宜しいでしょうか？」

「いや、過ぎたことはもうよい。もうすぐその癖も治る」

断言された。……いや、俺も早く治したいとは思っているのだ。だが、長年染み付いてしまった癖はなかなか抜けるものではなかった。今もこうして知らぬ間に握りしめている。手を広げると、銀が一枚に歩が3枚。駒台に戻したが、数手後の局面では俺はまた性懲りもなく、何か別のものを握りしめているかもしれない。

やがて対局が終了した。手駒の件で席主の娘の怒りを買ってしまったのだろう。ついに本気を出したらしい彼女に蹂躪され、ほぼ全駒に近い形での悪夢のような完敗だった。恐ろしく強い。ひよつとするとプロ棋士の三東四段より強いのではないかと、そんなことを思った。そしてまた、気が付くとやはり俺は手駒を握りしめている。席主の娘の持ち駒は駒台からあふれんばかりになっていた。

ふと、駒台と盤面に散らばる駒をさつと見て違和感を覚えた。

念のため目で追いながら数を数えてみると、四十枚の駒が全部ある。

……すると。

この手の中の感触は、何なのだろうか？

ぬめぬめと汗ばむ拳に視線を落とす。ゆっくりと左手を回し、掌の側を上に向けていく。

指の隙間から赤黒い血が滲みだしていた。

「……………！！！」

直後に俺は気を失ったらしい。

薄れゆく意識の中で、俺は病院に運びこまれた親父の最期の姿を思いだしていた。

親父のきつく固められた左手の中には、千切れ、ズタズタになり、真つ

赤な血に染まった、右手の親指があったのだ。その様子はまるで、将棋の持ち駒を握りしめているかのようだった。

気が付くと俺は自宅で布団に寝かされていた。そして――。

その日を境に、俺の手駒を握りしめる癖はピタリと止んだのだった。

隠せないからこそ隠す手の中で真理の花は虚構へ開く 落波

### 3. 王手飛車

創立百年を超える私立<sup>えいせい</sup>悦祭無高校の将棋部には、こんな言い伝えがある。

「学校のどこかに」呪いの将棋盤 が封印されている。その将棋盤を使った対局で王手飛車を掛けられた者は飛車を取られてから二十四時間以内に絶命する」

そのいわくつきの将棋盤が今、眼前にあった。厚さ五寸ほどの脚付の立派な将棋盤だ。

「まさか実在していたなんて……」

「ていうか本物？」

部員たちがざわついている。無理もない。言い伝えなんて誰も信じていなかったし、そんな将棋盤を見たことのある者はいなかったのだ。これまでは。

呪いの将棋盤を発見し、その封印を解くという快挙、というか暴挙を成し遂げたのは、二年前に高校将棋界に颯爽とデビューして以来の無敗という生ける伝説、我が将棋部の部長、常磐露草であった。実家が将棋道場を経営しているらしく、従って幼い頃からずっと将棋が強くなるしかないような環境で育ってきたということと言えよう。

ちなみに今年の「ミス悦祭無高校コンテスト」にて、有効投票全票獲得による完全優勝という人類史上類をみないと思われる偉業を達成していた。ギネスブックに載るかもしれない。というか、この部長の希少価値ときたら、レッドデータブックにだって掲載されてしまいかねない。

「これが件の将棋盤であることは十中八九間違いない。……ホラ」

と露草部長は重そうな将棋盤を軽く持ち上げてひっくり返して見せた。

「……うげっ」

盤の裏には「へそ」と呼ばれるくぼみがあるのだが、そこが赤黒く変色している。まるで血溜まりのようだ。へその横には「呪」の一字が、これも血のような色で書かれていた。

「……いや、あからさまにそういう文字があること自体、怪しいと思うのですが」

普通はイタズラだと思うだろう。普通の感覚の持ち主であれば。

「イタズラだと思うのか？」

「当たり前です」

「では試してみるか？」

「はい？」

ドン！と露草部長は将棋盤を床に下ろすと、僕の首根っこをむんずと掴み、将棋盤の前に正座を強要した。

……持ち時間十分、秒読み三十秒ルールで対局を始めて二時間後。もどこのくらい指したのやら見当もつかないほど何番も指した。他の部員たちはとっくに帰宅していて、いつの間にか夕闇の中で僕たちは二人つきりで先の見えない不毛な連戦を続けていた。一つ確かなことは、部長の無敗伝説をさらに補強しているということだ。それにしても将棋で負け続けるというのは恐ろしく精神にこたえる。負けが込むと、悔しさを紛らわせようと壁に頭を打ち付けるくらいでは済まなくなるのだ。いい加減気が狂いそうになる。どうしてこんなに、まるで身を引き裂かれては再生を繰り返す等活地獄の如くボロボロにされ続けなければならぬのかというと、「王手飛車」の局面にならないからだ。将棋はある一定以上のレベルの者同士が対局すると、うっかり王手飛車をくらう事

など、ほとんどありえない。実際にそういう局面が現れるのは「掛けさせている」つまり、王手飛車が掛かることを双方が承知した上で、それでもあえて、王手飛車を掛けられる側がその変化になることを誘導、または容認しているケースだけだと言っている。

「……部長」

「何だ？」

「あの、こう言っているんですが、部長がわざと王手飛車を掛けられてみれば宜しいのでは？」

「……なるほど。そうすれば、早急にこの命懸けの実験は終了して我々は帰宅することが出来るな」

「でしよう？」

「実をいうと対局を続けるのも飽きてきた。疲れたし。早く帰ってお風呂に入りたし」

「そうでしょう、そうでしょう……では早速」

「だが断るッ！」

「ここでまさかのジョ●ネタ！？」

鉄板すぎるお約束ネタだった。王手飛車の局面ではなくネタに誘導してしまつた。露草部長は美人で将棋が強く、その上かなり面白い人なのだった。我が将棋部の誇りであり、悦祭無高校の至宝でもある。

「私は言い伝えを信じているからな。王手飛車を掛けられたら私が死んでしまう。それはイヤだ。お前が死ぬ」

「絶世の美女に死ぬと言われた！」

わーい。露草部長から直々に暴言を賜るとは何という栄誉であろうか。これ以上のご褒美はない。僕は部長に罵られる度に、悦びで魂が震えるのだ！ビバ！露草部長！ハレルヤ！ハレルヤ！

……えーと。それはさておき。

定跡研究のためにあえて局面を作っていくというならまだしも、これは一応真剣勝負なのだ。であれば、無条件に王手飛車をかけられるようなヘマをするわけにはいかないし、そもそも僕だって、いくらなんでもそ

こまでのへボではない。よって、お互いになかなか王手飛車を掛けられたりはしないのだった。

「王手飛車取りっ！」

掛けられた。

人間、うっかりすることは誰にだってある。羽生名人だって頓死したことがあったのだ。いわんや、この僕をや、だ。それはそうとこの王手飛車、部長の可愛らしい掛け声付きだった。レアアイテムを入手したような気分である。これがPCゲームなら画面をキャプしてツイッターに投稿しているところだ。

さて。露草部長の表情を伺うと。

めちゃくちゃうれしそうだった。これを上回るものは恐らく地球上には存在しないであろうというぐらいの極彩色の微笑みを浮かべている。

「お主、死ぬのが怖いかな？」

改めて言われるとよく判らない。死ぬ、ということについて現実感がなさすぎる。これまでの人生で、僕は「死」ということを意識したことがなかったのだから。

「し、死ぬ、ってどういうことなのでしょう？」

「さてな。私は死んだことがないから判らぬ」

そりやそうだ。

「お主が死んでも地球は太陽の周りを回り続けるし、月は新月から満月の周期を繰り返すだろう。そんな世界の真相が、お主には全く関係のないことになるのは確かだな」

言っていることとスケールが大きすぎて、ますます判らなくなる僕だった。

「死んでしまえば、もう私に将棋でボコボコにされることもなくなるな」

それはよく判った。思い返せばここ二年間、露草部長には大変お世話になってきた。駒zone誌上ではとても描写できない意味でもお世話になったし、他にも文化祭のイベントで十人を相手に同時目隠し対局をさせられ、その疲労で熱発して一週間ほど寝込んだり（勿論将棋は全敗した）、新入部員の勧誘のためにバニーガールの格好で校門前に立たされたり

（ちなみに僕は真正銘の男子であって僕っ娘ではない）、団体戦に出場するのに部員が足りないからあと二人入部希望者を連れて来るまで顔を見せるなど真顔で言われたり（結局、こっそり部長を隠し撮りして、その生写真を餌に新入部員を釣り上げた）、隠し撮りがバレて露草部長のご実家（将棋道場）の天井にワイヤーで逆さ吊りの刑に処せられたり、もうそろそろ打ち解けた頃だろうと思って気安く冗談を言ったら本気で激怒され、罰として舌で靴底（足ではない。靴だ）を舐めさせられたり。そんな、何だか嬉しいご褒美……もとい、残酷な仕打ちを受けてばかりだったけど。

そんな日々が、僕は実は結構好きだったのだと思うと、何だか無性に哀しくなってきた、不覚にも目からホロホロと涙が溢れてきたのだ。

涙で滲んでよく見えない盤上。王手を掛けられた自分の玉將に手を伸ばす。王手を掛けられた玉は、相手の駒の効きから逃げるか、またはその効きを合駒で遮らなくてはならない。それが将棋の掟だ。僕が玉を避けたら、その次の一手で露草部長が僕の飛車を取るだろう。それから二十四時間以内に、僕は死ぬのだ。言い伝えが真実であったならば。しかし部長の様子からは本当であると思えない。部長は色々謎の多い人だけれど、嘘や間違いを言ったことはないのだから。

「部長は、僕が死んだら泣いてくれますか？」

「いや」

「部長は、僕が死んだら寂しいですか？」

「別に」

「部長は、僕が死んだら、たまには僕のことを思い出してくれませんか？」

「ありえぬ」

「言い伝えは本当なのでしょうか？」

「当たり前だ。これで死んだ人間を私は三人知っている」

背筋が凍る思いがした。不意に、この人はDSではなくガチでヤバイ人なのではないかという気がしてきたのだ。部長の顔を覗く。涼しげな、と思っていたその瞳は冷徹なものに見えてくるし、妖艶な、と思っ

ていた口元は凄惨なオーラを醸し出していった。可愛らしいと思っていた八重歯まで吸血鬼の牙みたいに見える。

手が震える。震える。震える。震える。震える。震える。勝利を確信した羽生名人が手を震わせながらトドメの一手を指すときのよう。しかしこの場合は違う。死の恐怖に慄くヒトの本能の震えだ。怖い。死ぬのが怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

「柳田」

と、露草部長が声をかけてきた。

「試しに玉ではなく飛車を逃してみてもどうだ？……私が知っている三人は玉を逃して飛車を取られた。飛車を逃して玉を取らせた間抜けは一人もいない。……どうだ？試してみる価値があると思うが？」

……しかし、そんな手は将棋ではありえない。王手飛車をかけられて飛車を逃がすだなんて。そんなバカなことをして。そんな巫山戯た手を指していいのか？そうすれば、僕の玉は助からなくとも生命は助かるのだろうか？いや待てよ？

言い伝えでは「王手飛車を掛けられたら死ぬ」のだったか？それとも「王手飛車を掛けられた側が、飛車を取られたら死ぬ」のだったか？後者なら、まだ僕の生命は助かる見込みがあるということだが、だが、そんなことがありうるだろうか？

散々逡巡しているうちに持ち時間は尽きてしまい、秒読みが始まっていた。対局時計のデジタル音声が、まるで僕の生命の火を削るように容赦なく刻を進める。残り十秒を読まれたところで僕は、慌てて盤上に手を伸ばし、震える指で駒をつまみ上げた。

「▲7五●●●」

——その数時間後。

私立悦祭無高校の正門前に、将棋の駒を一つ握りしめた首のない死体が転がっていた。

死神が愛した者を傷つけて君の輪廻はメビウスになる 落波

#### 4. 不如帰（ほととぎす）

最後にもう一度だけ将棋を指したい。と、佐々木宮雄は思った。

平日とはいえ、学校は夏休みに入っているはずなのに町並みは子どもたちの姿が少ない。塾にでも通っているのか。進学校なら補習授業をしていたりもするだろう。何のための夏休みなのかわからない。

「みんな忙しいな。ヒマなのは俺くらいもんだ」

30年ぐらい前までは、みんながもつとゆつたりしていたような気もするが、今では世の中全体があくせくしていて、まるで時間が何者かに盗まれてしまっていると思えない。I 県 T 市に生まれ育った佐々木宮雄が地元の市役所に就職したのは今から三十六年前のことだった。最初の部署に配属されてすぐ、職員による将棋同好会に参加した。その同好会も、ここ十数年ほどは、ほとんど会員が顔を出さなくなっていた。景気が悪くなり役所勤めへの世間の風当たりが強くなるにつれ、公務以外の活動を行うことが憚られるような空気になっていったのだ。今では、そもそも同好会が存続しているのかどうかすら判らない。かと言って将棋の人氣がなくなっただのかと言えそうというわけでもない。たまに同僚と将棋やプロ棋士の話で盛り上がることもある。聞けば最近は何コンを使ってインターネット上で指すシステムが流行しているのだという。佐々木はと言えばパソコンはさっぱり判らなかつた。パソコンを使える人間であれば、今頃こんなところをブラブラしていることはなかつただろう。佐々木宮雄は、今日、職場の上司に早期退職のための辞表を提出してきたのだ。この近くに昔からの将棋仲間、矢矧の家がある。彼と一局将棋を指して、それで終わりにしよう。

「——？」

佐々木が立っている交差点の対角線上に、一軒の木造家屋があつた。初めて見る。いつの間に建つたのだろうか？先月ここに来たときはなかつた。

たはずだ。すると最近建ったばかりということになる。

「この辺りで新築の一軒家なんて、いまだき珍しいな」

二階建てのその家は壁全体を黒く染めていた。漆塗りなのだろう。屋根の上から墨汁を垂らしたかのようである。目を凝らすと、正面入口のあたりにこれもまた黒っぽい色の長方形の小さな看板が打ち付けられているのが見える。黒い家に黒い板ではそこに何が書かれていたにせよ、ほとんどの人が見逃してしまわないだろうか。何故かその家屋が無性に気になって、吸い寄せられるように正面まで辿り着いた佐々木は、改めてその看板の文字に目を凝らす。そこには見事なまでの達筆で。

「将棋道場・不如帰」——と、そう書かれていた。

「てっぺん禿げたか？」

道場（看板に偽りがなければ）に入っていくなり佐々木は固まった。フリーズした。

確かに佐々木は頭頂部だけがかなり薄くなっている（まるで河童のようだ）が、平均的日本人は禿頭の男に面と向かって「ハゲ」とは、あまり言わないものだ。佐々木も言われ慣れてはいないから反応に困る。「はい、ここ数年ですっかり禿げあがりました」と事実を冷静に報告できるほど、佐々木の心臓は強くない。というか弱い。そもそも、触れて欲しい話題ではないのだった。

「てっぺん禿げたか？」

もう一度聞かれた。さすがに不審に思った佐々木が周囲に目をやると、戸口のすぐそこに竹細工の鳥籠がある。嘴の黄色い黒い鳥が中にいた。カラスではない。九官鳥であろう。すると、この失礼な物言いはこの鳥の仕業であったか。

「てっぺん禿げたか？」

また聞かれた。返事をするまで繰り返す気だろうか？ 仕方ない。

「ああ、おかげさまで、すっかり禿げてしまったよ」

「どうした柳雪……客人か？」

別の人物の声に驚いた佐々木が振り返ると、うら若い女性が一人立っていた。大人びて見えるが、セーラー服を着ていることからして、恐らく女子高生なのだろう。艶やかなストレートの黒髪は腰まで伸びて、そこから先は周囲の闇に溶け込んでしまつて本当の長さが判別できない。

「飼っていたホトトギスが死んでしまったのだが、跡取りがいなくてな。中々手に入らないのでペットショップで九官鳥を買ってきてホトトギスの鳴きマネを仕込んでみたのだ。ほれ、柳雪、鳴いてみせろ」

「てっぺん禿げたか？」

「それはホトトギスの鳴き真似だったのですか……」

そう言えば何とか言う作家が、ホトトギスの無き声をそのように表現したとかいう話を聞いたことがある。しかしそれは「テッペンカケタカ」だったような気がする。

「テッペンカケタカでは面白くないので少しアレンジしてみた」

「つて、やっぱり『禿げたか？』つて言つてたんですか！？」

……そう言えば。

この家屋の入り口にあった看板は。

「ここは将棋道場・不如帰。『不如帰』と書いてホトトギスと読む」

なるほど。看板に偽りなく、ここは将棋道場ではあつたらしい。するとこの女性が席主だろうか？

「私は、佐々木宮雄といます」

「そうか」

「わけあつて今日、仕事を辞めてきました。」

「そうか」

「でも、まあ、それはいいのです。私は今年五十八歳になりました。あとすこしすれば、どうせ強制的に定年退職でした」

「そうか」

取り付く島がなかった。会話が全く弾まない。これが見合いだつたら、縁談は確実に破談だろう。

「失礼ですが……」

「失礼と思うなら言わぬがよからう」

「それはそうなんですが」  
気になつてゐるのだからしょうがない。

「あの……席主は、年齢は……」

「わたしは席主ではない。その娘だ。ちなみに永遠の十七歳だ」  
意味がわからなかつた。

「名を聞かせてやろう…… 私は……」

—— 常磐露草としまつゆくさ。それが、席主の娘の名であつた。

「用件を聞こう」

「……用件？」

「道場に入つてきたのだから、将棋を指したいのであろうか？」

そうだ。佐々木は「最後にもう一度だけ将棋を指したい」という思いに囚われてフラフラと街を歩き、棋友の家を目指し、その途中この家屋の戸口に打ち付けられていた看板、その「将棋道場」の文字に誘われて、今ここにゐるのだつた。

「ここは、最果ての将棋道場。ここは、終わりの将棋道場。ここは——  
ヒトにもつとも相応しい一局を贈る処ところ。席料として●●●をいただ  
いている」

そう言つて。常磐露草は艶かしい手つきでゆつくりと佐々木の手を取ると、そのまま奥の部屋へと誘つた。

「さあ——。誰と、どんな将棋を、ご所望か？」

……その日を境に。

佐々木宮雄の姿を見た者は、誰もいない。

世を超えて産み落とされた卵には貴方を包む能力がある 落波

# 将棋詩

俺の棋譜はP18

ジエームズ・千駄ヶ谷

おれの棋譜は P18指定なんだぞ  
みせいねんのやつは えつらんおことわり  
その世界から 黄色いカーテンでしきられている  
うかつにあしをふみいれたら 逮捕されちまうぜ  
どうしてかって？

子供には しげきが 強すぎるから  
子供の成長に あくえいきょうを 与えるから

だから君たち あっちへいってなさい  
おれのような半端者に 世間の目はつめたい  
みんなおれの棋譜を見て さげすむんだ

おれの棋譜は 健全じゃないから  
おれの棋譜は 飢えているから  
おれの棋譜は 悲しくなるから

だけど なかにはおれの将棋をみにくるやつだっているんだぜ  
信じられないって？

おそらく ただの暇つぶしだろう  
あるいは 何かの勘違いかもしれない  
それでもおれは 唇を噛みながら 駒を動かす

無様な棋譜を 残し続ける  
愚かな失着も  
無残に散った痕跡も

あとになれば愛しく思えるから

きつとやつらには わかるまい

おれの 狂おしい愛情が

おれの 倒錯した希望が

画面の前で流した涙に だれも気づかない

そして 夜が明ける

部屋の間から 淡い光が 差し込んでくる

こきゅうが くるしくなる

おれの 将棋の時間が おわる

引き出しの奥の方から  
消しゴムが出てきた  
鉛筆で書いた薄れた文字  
目を凝らすと「歩」と書いてある  
これはあれだ小学生の時  
駒をなくして代用したやつだ  
その時の盤駒はどうなったのだろう  
消しゴムだけが今手元にある

風邪が流行って委員長も副委員長も  
休んでいていない中で  
一度だけ学級会の司会を任せられた  
運動もできないかつこよくもない僕が  
代用で輝けた一瞬  
あの頃は真面目で素直だったから  
そんな機会もあったけれど  
ひねくれて成績も普通でただの少年になって  
駒になることすらなくなった

ノートに書かれた論文の案の  
修正のためにその消しゴムを使うと  
ちゃんと文字が消えた  
まだ生きていたんだ  
本来の役目なら  
今だって主役なんだ  
歩にしまってごめんね  
ずっと忘れていてごめんね

百均で買った盤駒セットすら  
最近ほとんど使わなくなったけれど  
将棋のことはずっと好きだった  
好きだと思っっている  
その心が揺らぐときもある  
棋譜をあんまり確認しなくなった  
代表戦に出なくなった  
将棋を嫌いになっても  
世界はきつと何も変わらない  
三十九個消しゴムを買ってきて  
残りの駒を作った  
代用品でどこまでできるだろう  
また忘れてしまうのだろうか  
問題なく代用できるだろうか  
そもそも駒とはなんだろうか  
消しゴムとはなんだろうか  
もうなんだっていい気がしてきた  
もう僕が  
引き出しに入ってしまったおう  
きつと  
将棋ぐらいいしか楽しみがない  
暗くて楽しい場所だ  
もう一つ消しゴムを買ってきて  
「僕」と書いた

## 秘密の音楽庫

清水らくは  
原案協力 浮島  
跳馬

由多可の眼は、真つ赤になつていた。深夜一時を過ぎた対局室。そこにいるのはたつた三人だった。一人はスーツの中年男性、大道由多可である。腕組みをしたまま、時折小さく首を振った。膝の上には青いバスタオルが置かれていた。視線は盤面に向けられていたが、時折その向こう側に向けられることもあった。

そのようにして由多可に表情を確認されているのは、坊主頭の青年だった。すでに上着は脱ぎ捨てられ、ワイシャツの腕はまくられていた。前後に揺れながら目をきよろきよろと動かしていた。

そんな様子を見つめていた。腰に手を当てているのは、時折自らをつねって眠気を追い払うためだった。

朝十時、青年の表情は自信に満ち溢れていた。最近の成績、研究会での手の見え方、ネット対局でのレート上昇。全てが若者の気分をよくさせていた。しかも今日の対局相手は、特に目立った実績があるわけでもない中堅棋士、大道七段だった。

こんなときは、この世界では、だいたい強い若者が勝つとしたものであった。

しかし、青年にとって不幸だったのは、大道由多可は彼の印象よりも強い棋士であったということだった。プロ棋士である以上将棋が強いのは当たり前だが、彼の場合それに加えて体力があった。見た目はいたって普通の体格だったが、彼の年齢にしてはすつきりしている。健康管理をきっちりとして、必要な筋肉が保てるだけの運動もしていた。若さに任せて体に負担をかけている若者よりは、夜を戦い抜く体ができていたのである。

さすがに眼球だけはかなり疲れていたが、由多可の頭の中はすつきりとしているし、足もしびれていないし、背筋もピンと伸びていた。

少年の少し高い声が、秒読みを奏で始める。青年は頭を何度か叩いて、逡巡したのちに一枚の駒をつかんで、盤上にたたきつけた。

由多可は、表向きには顔色一つ変えなかったが、心の中で深いため息をついた。指せば指すほど差が開く。早投げで有名な秋嶋九段なら、三時間以上前に投了しているだろう。諦めきれないのは若者の特権だが、まだまだ粘り方が下手だ。

いくつもの言葉を飲み込んで、由多可は自陣を固めた。彼の陣は固く、大きく駒を得しており、全く攻めていない。

それから二十分。頑強に受け続ける大道七段の前に、ついにプロらしい手が尽きてしまい、青年は頭を下げた。

対局が終わっても由多可は表情を変えず、短い感想戦を淡々と終えた。青年は顔を赤くしたまま将棋会館を後にしたが、由多可はしばらく控室で水を飲んで待った。

深夜十一時半。由多可は会館を後にした。電車に乗って、地下鉄に乗り換える。駅から出てビルの間を通り抜け、彼の姿は一軒のバーへと吸い込まれていった。

すでに、深夜十二時になっていた。店内には小さなテーブルが二つと、カウンター席。壁には所狭しと焼酎瓶が並んでいた。

「こんばんは」

青いセーターを着た男が、由多可に声をかけた。この店の主だった。主はグラスを片手に、モップで床を磨いていた。

「どうも」

「今夜は来ないかと思ったよ」

「仕事が長引いたので」

由多可はカウンター席の一番右に座って、上着を脱いだ。

「焼き芋の気分だ」

「半年ぶりだね」

モップを片付けた店主は、壁から瓶を一本手に取り、カウンターの中にやってきた。

「そうか。あの対局は半年前だった」

「あの？」

「若者が無駄にあがいた後は、焼き芋焼酎を飲みたくなるらしい」

由多可の前に、お湯割りの入ったグラスが差し出される。それを軽く一口だけ飲んで、由多可は頬杖をついた。

「勝ったんだね」

「勝つべき対局だった」

「そうなんだ」

「まだ俺の方が強いから」

しばらく静かな時間が続いた。由多可は、舐めるようにして焼酎を飲んだ。そして時折、膝の上に指を打ち付けた。

「こんばんは！」

そんな空気を切り裂く、明るく大きな声。

「ああ、花生ちゃん、こんばんは」

振り向いた由多可の目に映ったのは、華やかなピンク色だった。カウソターの反対側に座った女性の、大きくてピンク色のリュック。

「あ、やっぱり目立ちます、これ？」

「え」

その女性は、人差し指で青色の唇を指差した。

「今流行ってるんですよ、ソールイータープロダクツっていうバンドのボーカルの、ルルカっていう子がしてて、みんな真似してるんです。ちょっと恥ずかしいけど、かわいくないですか？」

「あ、ああ」

由多可は、椅子の上で少し後ずさった。

「あ、すみません、あたし国山花生って言います。このお店にはよく来てるんですけど、会うのは初めてですよね？」

「そうだね。私は大道」

「はじめまして、大道さん。……大道？」

花生は、由多可の顔をしげしげと見つめる。

「ひよっとして、将棋の人ですか？」

「まあ、はー」

「やっぱり。この前、解説してましたよね」

「ああ、あれね」

由多可は、こういうことが少し面倒くさかった。彼は将棋を指す時以外、誰でもないものになりたいと願っていた。だからこそ、仕事場から遠い場所で飲むことを好んでいる。しかし、花生の勢いは止まない。

「すごい、すごい、こんなところで会えるなんて！ ああ、あつし、将棋はできないんですけど最近興味持って、あ、あの人、皆川さんがすごく好きで」

「許心ちゃん？」

「はい！ かっこいいですよ。あたし、ああいう人を主人公にした小説を書きたいんです。それで、将棋の小説を集めた雑誌を作るのが夢で、タイトルも考えてるんです。『駒・zone』っていう」

「駒損……」

「だから、一度皆川さんに会ってみたいです。彼女みたいな女性棋士を主人公にした小説を書きたくて」

「まあ、彼女は俺の妹弟子だから、知っていることもあるよ」

「本当ですか！」

由多可は、言ってから少し後悔した。相手のペースに巻き込まれるのは、嫌いなのである。そして、花生はペースを手放しそうにない。

「どんな人なんですか？ やっぱりクール？」

「おとなしいけれど、面白いところもあるよ」

「へー、そうなんですね。もてますか？ もてますよね？」

「そこまでは知らないけど、もてるんじゃないかなあ」

由多可は、何とか昔のことを思い出そうとした。彼の所属する一門は、全員が集まるということはめったにない。師匠はほとんど名義上のもので、一番上の兄弟子が皆の面倒を見ていた。由多可が妹弟子のために何かをするという事はなかった。

「昔から金髪だったんですか？」

「子どもの頃は黒かったよ」

「へー」

「普通の子だった。うん、プロになるタイプじゃないかと思ってた」

「そうなんですか」

「けど、いつからかかわったね。ああ、そうだ。弟弟子と仲良くってね。」

「辻村さんもプロですか」

「プロだよ。かなり強いプロ。彼に厳しく言われた一言で、なんか変わったとか言っていた気がする」

「そういうエピソード、好物です！」

花生の前のめりな態度に気圧された由多可だったが、嫌な顔をするわけではなかった。

もちろん、彼の機嫌が悪くならない一番の原因は、勝負に勝ったことだった。その意味で花生は、大変に運が良かったのである。

由多可の朝は早い。

早いといっても、仕事に行く必要がない人間にしては、というレベルである。

棋士にとって一番重要なのは対局だが、ほとんどの日はそれが無い。週に二度対局があれば、大変強い棋士であると言える。

その他にも普及活動やタイトル戦の解説などが棋士の仕事だが、誰もがするというわけではない。由多可は先日テレビ棋戦の解説をしたが、実に七年ぶりのことだった。

やはり、人気棋士の方が仕事は多い。

強い人はもちろんだが、面白い人、個性的な人が好まれる。由多可は実績のある棋士ではあるが、地味な中年男性でもあった。華やかな仕事は、なかなか回ってこない。

よって、由多可は多くの日々を、自由に過ごすことができた。ただ、その自由は魅力的で危険な自由だ。彼の同期の一人は、若さを満喫した結果成績が伸びず、今では引退まであと四年となってしまった。共に遊んでいた時期もあった。しかし由多可にとっては、刹那的に得られる享

樂よりも、勝負で得られる充実感の方が大事だった。彼は友人たちと遊ぶことをやめ、若手たちの集団から離れ、一人で将棋と向き合う道を選んだ。

手際よく朝食を作り、テーブルの上に並べる。テレビもオーディオもつけない。澄み渡るような静寂の中で、由多可はただ食べることに集中する。

約三十分。ゆっくりとした食事を終えると、それから十分かけてコーヒーを淹れる。そして、十分かけてコーヒーを飲む。

何年もの間、毎日繰り返されてきた。由多可は、こだわりからそうしているわけではない。変える理由が思いつかなかっただけである。

対局の翌日だとしても、ペースを崩すことはない。とにかく彼は、早起きをして、朝食を食べる。きつい時は、十時ごろから眠りなおす。

由多可は四畳半の部屋に入り、座った。その部屋には、将棋盤と駒、棋譜の書かれたノート以外は何も置かれていなかった。

由多可は駒を並べ、しばらく瞑想する。そして、そつと一枚の駒に手を伸ばす。

頭の中にある棋譜を、たどっていく。それは、これは何度も何度もならべたものだった。

古典の中から見つけた素晴らしい棋譜を、野球選手が素振りをするように、由多可は練習として並べた。頭ではなく手が覚えるのだと、彼は信じていた。

そのあと、新しい棋譜もならべる。こちらは、ところどころ立ち止まる。自分だったらどう指すか。名人だったらどう指すか。若手だったらどう指すか。十秒将棋だったらどう指すか。様々な可能性を考えて、様々な手を探す。その局面の最善手だけではなく、状況に合わせた、指す人に適した手をも考えるのである。

気が付くと十二時を過ぎていることが多かった。由多可は着替えて、家を出る。住宅街を抜け、駅一つ分歩き、裏路地に入り、小さな喫茶店に入る。窓際の席に腰かけ、ランチとレモンティーを頼む。

三十台を過ぎた頃から、喫茶店での昼食は由多可の日課になっていた。

それまでは昼も自炊だったが、そうすると、太陽を見ない日が続いてしまった。外に出るために、外食するという目標を作った。

特においしいわけではない。由多可はあまり、味に頓着がない。おいしいものにこだわるよりも、もっと別のところに気を配りたいと考えていた。食事をとるならば人が少なく静かで、店員も自分を気にかけないところがいい、と彼は思っていた。だから、おいしすぎる店は候補から外れることが多い。

昼食を終え、食後のコーヒーを飲みながら詰将棋を五問解く。特に難しい問題ではない。彼はこうして、満腹で頭に血が回らないコンディションの中でも、普通のことがちやんとできるかどうか試しているのである。店を出た由多可は、来た時とは違う道を通って家へと帰る。スーツの男性とすれ違う時、由多可の足取りは重くなる。

「ならないって言っただろ」

由多可は空を見上げる。青色のスクリーンには、亡くなった父と、公務員になった兄の顔が映っていた。時折見える二人は、一度も笑っていたことがなかった。

三時ごろ、自宅に戻ってくる。そこからは夜までまた研究である。仕事のない日の一日は、いつもこのように過ぎていくのである。

「あの」

会館に入ろうとする由多可を、呼び止める声があった。振り返ると、制服を着た女性が紙袋を持って立っていた。

「はい」

「この職員の方ですか？」

「ん……まあ」

「きよ、今日、向井様はいらっしゃいますか？」

「向井……はそうだね、来るね」

「あ、ありがとうございます！ 待ちます！」

「そう」

由多可は、少しだけうなずきながら会館へと入っていく。そして靴を脱ぎながら、首をかしげた。

「職員、なのかねえ」

疑問に費やす時間は早めに打ち切り、由多可は階段を上がり、対局室へと入っていく。すでに本日の対局相手は盤の前に座っていた。今日の相手は、先日よりもつとつと活躍している若手だ。

王賢戦決勝リーグ。今日の対局に勝てば、タイトル挑戦の目も残る。長い棋士人生の中で、最もタイトル戦に近づいている瞬間なのである。

だが、由多可はタイトル挑戦に関してはそれほど気にしていなかった。彼は、自分が将棋界の中でどの位置にいるのかわかっている。これまでどれだけ努力しても、頂には近寄ることもできなかった。だから、今になって突然届くとは思っていない。ただ、彼の感情が特別動かされる対象が、ある。

リーグ最終戦の相手は、向井二冠なのである。

子どもの頃からのライバルで、彼に勝つことにより由多可は小学生名人になった。数年の間、由多可は確実に数歩前を歩いていた。

そして、プロになって二十年。公式戦で由多可は、一度も向井に勝っていない。もがきながら上を目指すと先で、向井は二十台のうちにタイトルを獲り、トップに立ち、由多可とは全く違う景色を見ることになった。

由多可は、向井以外の相手には強く心を動かされることはない。淡々とどのようにすれば勝てるか、それを考えるだけだった。けれども向井には、何も通用しない。何もかもが、由多可を上回っていた。だから由多可は、私情を押し込めることをあきらめた。勝ちたい。小学生の日に見た向井の悔しそうな顔を、もう一度見たいのである。

その向井は、数分経ってから入室してきて、由多可の隣に座った。リーグ戦は一斉対局なのだ。手には先ほどの紙袋を持っていた。

特別かっこいいというわけではない。ただ、一流の人間に特有なオーラを、向井は過剰なほどに放出していた。一度見たら誰でも脳裏に刻みこまれてしまう、そんな人間だった。

由多可は自らが普通の人間だということをいやというほど実感し、そして対局が始まるのを待った。

「あ、大道さん！」

時間は十一時。いつものバーに入ると、カウンターには花生がいた。

「国山さん」

「また会えましたね！」

「……ああ」

店主は声をかけず、コップに水を注いで、由多可に差し出した。

「ありがとう」

「水なんですか？」

「花生ちゃん、今日の国山さんはたくさん飲むからね。酔う前に水を用意しとくんだよ」

「そんなには飲まないさ」

そう言いつつも、由多可は最初の一杯をすぐに飲んでしまった。花生

は、その様子をじつと見ていた。

「特別な日だったんですか」

二杯目を受け取った時に、花生は尋ねた。

「そうでもない。次が大事だ」

「次ですか！」

「……君は、向井栄進という男を知っているかね」

由多可は、ぎょろりとした目で花生をにらんだ。

「あ、あの名人、ですよね」

「名人は二年だけだ。今は二冠」

「へー」

「次は、向井とやる。向井は俺に勝てばプレーオフだ。なあ、大事だろ」

「良くわからないけど、そんな気がします」

由多可は、突然黙り込んで、グラスの中に視線を落とした。花生も口

を閉じて、その様子を眺めていた。

「失礼」

沈黙を破った後、由多可は立ち上がりトイレへと向かった。

「どうしたのかな」

「負けたんだよ」

「でも、負けてもクールなタイプだと持っていました」

「本人はそう思ってるかもね。でも、彼は背負ったものを背負い続けるからね。将棋以外ないから、将棋で負けるとどうしようもないんじゃないかな」

「あれですね、いわゆる不器用！」

店主は、小刻みに何度もうなずいた。

由多可は、いつもより少し早く家を出た。

向かう先は、駅。いつもと違う路線だった。

名刺を確認しながら、初めての土地へ。

由多可は、あるビルの前で立ち止まった。ガラス張りの明るい建物で、

一階はスポーツ用品店になっている。由多可は脇のエスカレーターを上

がり、二階へ。入口の青い看板には、「KUNI MUSIC」と書かれていた。

由多可は店内に入るなり、固まってしまった。全ての棚に、CDが表

向きに置かれていたのだ。どこにもランキングコーナーや、新作コーナー

などは見当たらなかった。壁も床も黒を基調としている。そして、いた

るところに白い矢印があり、その中に「JPOP」や「USRAP」など、ジャ

ンルを示す文字が書かれていた。

由多可は首を動かして店内を見回したが、驚くほどに日本語が見当た

らなかった。仕方なく、なんとなくわかる日本のロックコーナーへと、

矢印を負う。奥へと進みようやくたどり着いた先に、「ROCK」と書かれ

た棚があった。やはり、全てのCDが表向きに置かれていた。そしてアー

ティスト名とタイトルが書かれたラベルが、全てのCDの前に置かれて

いた。

「シカゴスプレーか。聴いたことがあるな」

カラフルなジャケットが気になり、由多可は一枚のCDを手を取った。すると、あらわになった棚に文字がびっしりと書かれていた。シカゴスプレーの結成の経緯、構成、デビュー年、メンバーの好きなアーティスト、彼らのことが好きなアーティスト、アルバムのおすすめ曲、そしてライブをしてきた場所。びっしりと、情報が書きこまれていた。

「意外なところに食いつきますね!」

いつの間にか、すぐ隣に花生がいた。黒いシャツに黒いズボン、地味だった。

「国山さん」

「来てくれたんですね」

「先日は迷惑をかけたから」

「覚えてるんですか」

「いや、正直……」

由多可は、ばつが悪そうに視線を落とした。

「バーに行って酔うのは、普通じゃないですか」

「そうとも言えない」

「このお店、変でしょ」

「え、あ、ああ」

「父が経営してたんですけど、まあ、やばくて。みんなネットとかで買うし、そもそもCD売れないし。作家目指してたんだけど、思わず『私は何とかする』って言っちゃって」

花生はびよんびよんと跳ねながら、目を輝かせていた。

「売れているの」

「前よりは。毎日音楽漬けですよ!」

花生は一枚のCDを手にとると、それをひらひらと振って見せた。

「大道先生へのおすすめです」

CDが再生機に入れられ、店内のBGMが変わった。

「これは?」

「スペースタオルっていうバンドです。まだ有名じゃないけど、働く中

年男性にお勧めだし、シカゴスプレー知ってるならあうかもって」

由多可は、耳を澄ませた。彼は普段あまりボーカルの入った曲を聴かない。若者向けの音楽はめつたに聴かない。

それでも、じっくりと聴いた。聴けた。

「いいね」

「よかった!」

花生は、小さな声で付け加えた。

「2800円ですので、よろしければ」

いつもの焼酎バーに、由多可は初めて二人でやってきた。しかも、若くてきれいな金髪の女性とであった。

「わあっ」

その人の姿を確認するなり、花生は甲高い声を上げた。

「あの人ですか?」

「そう、青い唇の人」

花生の横に金髪の女性、その横に由多可は座った。

「初めまして。皆川です」

「あ、あの私、国山です!」

二人の女性が自己紹介している横で、由多可は泡盛を飲み始めた。

「珍しいね」

「え、何が」

「対局ない日でしょ」

「ああ、約束しちゃったから」

「それも珍しい」

由多可は、対局の後は外で飲むと決めていた。そうやって、一つの区切りをつけてきたのだ。

「どうやったたら、そんなかっこよくなれるんですか!」

「え、かっこいいかな……」

花生は皆川に質問攻めをしている。皆川はたじろぎながらも、できる

だけ視線を逸らさないようにして応対していた。

「いつから染めたんですか」

「こ、高校入った頃かな」

「服はどこで買うんですか」

「特に決まってるないけど……」

「爪の手入れは」

由多可は内心「将棋のことは聞かないのか」と思ったが、口には出さなかった。確かに皆川を目の前にすると、どういう女性なのかが一番に気になる。将棋界にはあまりいないタイプだ。

「大道さんさ、前ちよつとしてた話有るじゃない」

店主が、少し前のめりになった。

「えっ」

「若い頃の話」

「そりゃ、若い頃は俺にもあったけれど」

「いや、色っぽい話。やっぱそりゃそういうのもあるよね、と思って聞いてたからさ」

「ああ、あの話」

由多可は、遠い目をした。実際に、遠い日の話だった。

待望の四段になった後、多くの若手が「期待の星」になる。実際、由多可もよく勝った。勝てば注目されるのが勝負の世界だし、知ってもらふ機会があれば、一人の人間として興味を抱かれる機会も増える。

性格も見た目も地味な由多可だが、その頃には少し遊びもした。

だから、恋もした。

何をしてても、勢いで勝てる時期だった。由多可は好きな人のために時間を割いても、誰もがそうするのだから差はつかないと思っていた。

しかし、二年経ったころ、彼は気付いた。確かに多くの仲間と差はついていない。けれども、先を行く者との差が詰まってもいかなかったのだ。向井が、タイトルに挑戦した。それまでは、二人の差はほんのわずか

だと思っていた。だが、由多可はその姿を見て、そしてその棋譜を見て、気づいてしまった。差は、どんどんと広がっていたのだ。

そして、向井は婚約を発表した。出会って二か月、「すぐにこの人と分かりました」という、伝説に残る「早見え婚」だった。

由多可は、彼女と別れた。遊ぶこともしなくなった。彼は、極端しか選べない人間だったのだ。

このバーに来るようになったのは、その頃だった。仲間に見つからない場所で、いろいろなものを彼は洗い流したかったのだ。

「実際さ、ひどい話じゃない」

「まあ、ね」

「その後、その娘とは会ったの」

「まあ、うん。いやね、実は関係者で」

「それは初耳だな」

由多可は、グラス越しに天井を見た。

「棋士仲間の妹だったんだ。彼女もプロを目指していた」

「それで、どうなったの」

「彼女はプロになれなかった」

「責任は感じた？」

「勝負は一人でするものだから」

「厳しいね」

「そういうものだから」

由多可は、気づいていなかった。いつの間にか花生も皆川も、彼の言葉に耳を傾けていたことを。

朝食時に、オーディオの電源がつけられることになった。

再生されているのは、スペースオールのアルバム。ロックな中にもジャジーな響きがあり、力強くも艶のあるボーカルが特徴だ。

淡々といつも通りの食事を続ける由多可。ただ、気づかないうちに足の指先が細かくリズムを取っていた。

三八分の演奏が終わると、由多可は席を立ちCDを止めた。研究の間には、音楽は許されない。

しかし、いつもものようにはいかなかった。盤を前にして、集中することができなかった。

一つは、次の対局が特別な意味を持つことが理由だった。向井は由多可に勝てばプレーオフに進出できる。向井が本気を出す必要がある状況で、当たるのだ。

ただ、それだけではないことは、明白だった。三日前から、返していないメールがある。それは、内容のせいではなかった。若い女性とメールをしているということが、由多可は怖くなったのだ。

花生が送ってくるのは将棋に関する質問ばかりで、由多可も最初は自然に返していた。けれども彼には、仕事以外でメールをするという経験がほとんどなかったため、彼女とのメールに後ろめたささえ感じてしまふのだ。

由多可は、惑っていた。そんなメールのことを気にしてしまうことに彼は立ち上がり、リビングに出て、いつもは飲まない二杯目のコーヒーを淹れた。五分で淹れて三分で飲んだ。

戻ってきた由多可は、昔々の棋譜を並べ始めた。小学生の時の、向井戦だった。それは、最後に彼に勝った対局でもある。

かつて、将棋は楽しいものだった。今の由多可にとっては、苦しいものでしかない。そして、仕事とは苦しいものだと彼は思っている。

だが、今日の由多可はそんな思いを飲み込み切れずにいた。歯を食いしばって、幼い日の自分と対峙した。希望しもなく、劣等感などあるはずもなく、普通のピカピカとした大人になれると信じていた少年の心と。二十年もたってしまったのだ。強く自覚して、由多可の心は真っ白になった。

深夜十時。由多可は外にいた。

全く集中することができず、どうしていいのかわからず、気が付いたら家を出ていたのだ。そんなことをしている場合ではない、というの頭では分かっていた。明日は、最も大事な対局の日なのだ。

ここ数日、無理やりいつも通りに生活しようとしてきた。けれども、盤に向かえば向かうほど、将棋から心が離れてしまうのだった。そして眠りにつくと、夢の中で過去の棋譜が襲ってきた。向井に負けた、幾多の棋譜が。

家には、彼を救えるものが何もなかった。気が付くと、由多可はいつものバーの前にいた。

しばらく躊躇した後、扉を開ける。カウンター席に、金色の髪が見えた。

「皆川……さん」

「あれ、大道先生。明日来るはずって聞いていました」

振り返った皆川は、手に紙の束を持っていた。軽く会釈した店主の手にも、同じものがあつた。

「大道さんの分ももらってるよ」

「え」

マスターは、さらなるもう一部を由多可に差し出した。

「あの、とりあえず……水を」

「うん。何で割ろうか」

「……ロックで」

紙の束を受け取った由多可は、皆川の横に腰かけた。

冷えた水を口に含みながら、彼は原稿を読み始めた。タイトルは、『五割一分』、作者名は国山花生。

由多可がその小説を読んでいるのを、店主と皆川は見守っていた。そんなことにも気づかず、由多可は作品を読み終えると、目をつぶった。

「まだ前半らしいけど、どうでした」

「なんと行っていいかわからない」

「とりあえずひどいのは、私、ほとんど出てないですよね」

「うむ」

「それに……主人公、大道先生に似てますよね」

「えっ」

「きつと、モデルですよ」

由多可は、最初の一ページを読み直した。若手なのに冴えない成績の主人公は、突然貧乏な少女から弟子入り志願される。そんな始まりだった。

「これが、俺？」

「勝てないとかはともかく、なんか、似てるところがありました」

「同感」

店主も、深くうなずく。

「そうなのか。そうなのか？」

由多可はグラスに口を付けたが、氷が下唇にガツンと当たった。

「む。明日、大事な対局なんだ。その後にまた」

由多可は千円札を置いて、立ち上がった。

「頑張ってくださいね」

「ありがとう。皆川さんも、早くタイトル戦に出るように」

「はい」

店を出た由多可は、何度も首をかしげた。

「本当に、俺なのかね？」

足取りは、いつものようにゆっくりだった。

由多可の頭の中に、アルバムの四曲目が流れ続けていた。繰り返して、繰り返して。ひねくれているけれど、前向きな歌詞。確かに、自分に合っている、そう思った。

対局のさ中だった。

由多可はもう、盤上から意識を離れていた。差がついてたし、相手は間違えない人間だった。

まれにみるひどい内容だったが、悔しさややるせなさを感じることはなかった。むしろ、心の中がすっきりとしていた。

世界が違うのだ、彼はそれをはつきりと知った。向井と自分とでは、見えている景色が全く違う。

将棋以外には何も求めてこなかった日々。そこまですても、近づくことさえできなかった。リーグを陥落する自分と、プレーオフに進出する向井。家に帰ったら笑顔の奥さんが待っているんだろうな、と、由多可はそんなことまで想像した。

どこまでさかのぼれば幸せだろうか、そんなことも考えた。由多可は、仕事としての将棋を好きになったことはない。将棋の中に特別な何かを見出したこともない。それでも、見出した人生もあったかもしれない、その方がいい人生だったかも知れない。

「負けました」

アルバムの四曲目が鳴りやまない中で、由多可は頭を下げた。向井は一度視線をそらしてから、小さく頭を下げた。

由多可がバーを訪れたのは、対局の次の日だった。

「どうすればいいか少しわからないな」

由多可の顔を見るなり、店主は首をかしげた。

「圧敗過ぎて、何ともなくなったものだから」

「それだけかな」

由多可は麦焼酎を注文したが、口をつけなかった。

「花生ちゃんかい」

「え」

「最近、大道さんが来るときはだいたいたいたからね」

「まあ、そんなこともあるよね」

「本当にそう思うの」

「どういことだ」

店主はグラスを置いて、その中に由多可と同じ焼酎を注いだ。

「まあ、飲もうよ」

店主はグラスを揺らしながら、由多可の眼を覗き込んだ。

「彼女は焼酎が苦手」

「そうなのか」

「でも、ここに通ってた。まるで、常連になっておきたいかのように」

「まあ、そういうこともあるだろう」

「ねえ、大道さん。もう少し、馬鹿馬鹿しい人生送ってもいいんじゃないかな」

「馬鹿馬鹿しい……？」

「花生ちゃん、昨日は寂しそうだったよ」

由多可は、頭をかいた。

「女の子ってのは、いつの時代も不思議な生き物だ」

由多可は、再びKUNI MUSICにやってきた。

店内を見渡し、さらに歩き回った。

「あ、大道さん」

「久しぶり」

由多可は花生を見つけるとしつかりとその目を見つめてから、一万円札を二枚、彼女に向かって差し出した。

「え、これは」

「これで、俺にあうものを見つくるってくれ」

「は、はあ。うん。かしこまりました！」

花生は二万円を受け取ると、ぐるぐると腕を回した。

「絶対に気にいるもの見つけるから安心して」

「うむ。それと……」

「ん？」

「小説、完成を楽しみにしてる。ちゃんとメール返すから、何でも聞いてくれ」

「はー！」

「どれぐらいかかる？」

「十五分ほど大丈夫」

「わかった。また、戻ってくる」

「はい」

由多可は背を向けて、店を出ていった。彼が外に出た後大きく息を吐いたのを花生は知らないし、花生が小さくガツポーズしたのを、由多可は知らない。

由多可の家に、ラップが流れていた。

最初は戸惑ったものの、聴いているうちに単純に楽しい、と感じるようになってきた。韻を踏むというのは歩を突き捨てるようなものだな、とまで考えた。

そして彼は、将棋盤の前に座っていなかった。朝食が終わってから、ずっと小説を読んでいた。

「月子さん、よかったなあ」

思いが、声になって漏れていた。

声にならない思いもあった。「一人ぐらい弟子をとるのも、悪くいかもしれない」

音楽が鳴りやんだ。由多可はCDを入れ替え、部屋にはテクノポップが流れ始めるのだった。

将棋短歌

しむしむ

野良猫の背中で語る憂鬱は行き場をなくした桂馬みたいだ

八月の乾いた空気を呑み込んで震える右手で虚空を撫でた

検討はとつくに打ち切り？それでもね感じていたい君の吐く息

どつともつと

間接キスの賞味期限をたしかめる君ふれし駒召し上げて

欠片食器

刃こぼれが激しいほどに愛おしく敵陣深く傷ついて欲しい

## 香車とみかんゼリーとなつの日。

なしもん

こんにちは、なしもんと申します。短歌を愛するしがない大学生です。実は、駒 zone vol.8の電将短歌のところで、一瞬だけ名前を見せていました。偉そうに詠んでいましたが、私は将棋に関しては、駒の動きはいざ知らず、二歩が禁じ手であるともついこの間知ったまで。最近詰将棋を始めましたが、駒を成らせ忘れる(?)など、相変わらずドシロートの域を抜け切れないでいます。

そんな私が、駒 zoneを読んでいたある日のこと。一首の歌に目がつきました。

「我が生は香車なりき」に憧れる「桂馬」であると知った今日こそ  
(半島)

香車のようなまっすぐな生き方に憧れる桂馬。素直に前進できないという自分の運命を悟り、若々しい気持ちで自由に生きることを望んでいるのでしょか。

あまり読み込まずにストレートに解釈。すごく正直な、のびのびとした歌です。

更に少し読み進めると、もう一首。

ネタがない……将棋知らない……わからない……棒銀語る友達怖い……

(半島)

いやーそれよー！と、思わずキーボードをカチカチ。将棋にか勢にしてみれば、戦法？なにそれおいしいのかな？と言いたくもなつてしまします。短歌が好きだからと将棋短歌を詠もうにも、ネタに困ってしまう、あるある。

私はこの詠み手さんにいたく共感しました。この方も、きっと将棋に關してはあまり詳しくないのだ。でも将棋短歌を詠みたい！！一緒だ！！！！まあそんなことがあつたわけです。この詠み手さんこそが浮島さんなのです。

浮島さんの将棋短歌を読んで、どんな印象を受けるか？そりやもう読む人にとつて様々でしょう。

たとえば、私が駒 zone vol.1の短歌を読みますと。

ソッコーで穴熊になる君が好き僕も勝ちたいキミに勝ちたい (半島)

この歌を鑑賞して、穴熊という戦法を知りました。浮島さんありがとうございませす。笑 あ、この時はまだ半島さんだったんですね。

対局を始めてすぐにかたい守りに入る相手を、是が非でも打ち負かしたい。ぐぬぬ。

あるいは……。恋する相手はガードの堅い子。話しかけてもすぐに守りに入っちゃう。難攻不落。ああー、どうにかして君を投了させてやりた いぜ。(鼻息)

午前七時ヨ山手線でふと気付く穴熊の玉苦しそうだな (半島)

私は福岡生まれの福岡育ち、在住は京都です。

山手線……み、見たことすらないけど、なにやらトカイのノリモノらしい。午前七時は通勤ラッシュで、人もぎゅうぎゅうなんだろう。乗るか乗られるか生きるか死ぬか、そんな状態の車内でふと思ひ出した、穴熊の玉。あの玉も息苦しいのかな。

いやーおれは生き苦しいぜ。

この二つをはじめとして、私が浮島さんの将棋短歌に共通していると感じるのは、将棋というコンテンツの比喻性、イメージ性です。

将棋をそれほど詳しく知っているわけではない、そんな人の感覚は、将棋短歌というジャンルにおいて実はとても重要なのではないか。(と自分に言い聞かせる。そして詠む)

戦法、わかりません。形くらいしかわかりません！泣 そんな私が穴熊について詠んだとしても、同じように穴熊を何かの例えに使うでしょう。

比喻性や象徴性だ？そんなもんは将棋にわか勢の特徴だ。やーいやーい。などと言われてしまえばそれまでです。しかし私はその抽象性に将棋と短歌の世界の中庸を見ます。

いつだってあなたの指した棒銀はいなづまみたいに透明でした (半島)

時はいま 退くなどもはや許すまじ照らせ月さび銀の屍を (同)

ところで、*voice*から順番に読んでいくと、少しずつ短歌自体の雰囲気が変わっていつていることに気がきます。

さらさらとすりへらしつつ傾いて「ぼくはあなたに負けたくなかった」  
(半島)

「ぼくはここだ ここにいるんだ」盤上のアナタを今日は否定していく  
(同)

うん、短歌だ。と素直に思いました。表現がやわらかで優しく、それでいて実直な印象を受けます。

ひとつめの歌では、対局後の様子が詠まれているのでしよう。「泣く」ではなく「すりへらす」と表現されているところ、好きです。

誰かと対局って、私はあんまりしたことないけど、きつとメツチャ頭使うんだろな：ううむ。

ふたつめの歌には、将棋の対局というもののイメージをふつと感じます。

盤上の相手と自分は、まぎれもなく敵味方の関係。相手を否定して生き残っていかねばならないという駒たちの人生：もとい駒生に、力強さとともに一種のはかなさに涙を禁じ得ません。ううつ。

かなわなない駒うばいとる姉ちゃんのそのへビイチゴひきちぎる指  
(半島)

なにもかも奪い取られた戦歴をきょう大空へかえすさびしき (同)

だんだんと「色」を、強く感じ始めます。

色彩が、あるいは情景がぱつとイメージできるということは、短歌においてとてもたいせつなことだと個人的には思っています。

さらに読むなしもん。

*voice*の、「駒とおむすびとペンギン」から引いてみます。

「ひとつずつ月をあおぐとひとつずつわたしは崩れていなくなってしまう」  
(浮島)

やさしさは肉感的でおそろしい今日の零時は無機質である (同)

将棋からさらに派生している歌で、さらに象徴的なものになっていま  
す。  
このあたりになると、感覚に根ざした歌が多くなってきたと言える  
でしょう。詠み手の無意識に入りこむような、そんな鑑賞ができそう  
です。

先ほどまでは私の感想をつらつら述べてきましたが、こういった、あ  
る種別の次元にある歌を解説するのは野暮なことだ。ふん。と思うので、  
代わりにさらに引くことにします。

手を伸ばせば午前6時の網フェンスの向こうへひとり隔たれた朝は  
(浮島)

羨望は肺より深くポリ袋をこらんよあれがキミの翼だ (同)

年の瀬は吐く息ばかりつめたくて炭酸水におぼれ死ぬペンギン (同)

さて、ここからは私がすごく浮島さんらしくて好きだな、と勝手に思っ  
ている歌たちを見ていきたいと思います。

うーん、すごく楽しい今。みかんゼリーおいしい。

日常におれが疲れて死んだなら海に向かって歩を捨ててくれ (浮島)

日常・おれ・海・歩。イメージの対比がぱつと頭に浮かびます。  
海というとても大きく存在と、おれと歩という小さな、(たと  
えば歩のように) ありふれた存在。海と死のイメージが重なって、背筋  
がぶるつとなりそうでもありますな。

どうでもいいけど、海が炭酸水だったらどうなるんでしょうね。  
お肌への効能を信じて、女性がたくさん入りにくるのでしょうか。

なつの空はソーダアイスの色、そして空を飛べない香車のお墓 (浮島)

この歌に関しては、以前駒 zone でも少し触れられていたような。

うーむ。「空を飛べない香車」という文字を見ると、どうしても空を  
飛ぶ香車をイメージしてしまいます。ヒコーキ、青空、一直線。飛べ、  
香車。是非とも彼方へ行ってくれ。

それにしても、「人間の無意識は否定形を理解できない」というのは  
ホントなんですね。

これは心理学的なものでしょうか。おしえてーおじいーさんー  
改めてこうして歌を読んでいますと、やはり感じるのは「色」、そして  
きわめて身体的な空間の広がりです。

たましいが腐らないよう真夜中に冷蔵庫へとしまわれた棋譜 (浮島)

あなたとの対局時間を買います、白い貝貨とハッカ油で (同)

そして、電王戦に際して詠んだ電将短歌。私も一首投稿させていただきました。vol.8ですな。

快速で詰め将棋を解く学生とアンドロイドのための音楽 (浮島)

将棋というコンテンツも、近代科学の恩恵にあずかってデジタル化されてきました。

将棋盤と駒がなくても、スマートフォンやタブレットさえあれば、いつでもどこでも将棋を指すことができます。しかも、顔さえ知らない人と。

なつかしの棋士と指せませす超時空電算機式将棋システム (浮島)

タイムマシンに乗って、昔の棋士の方々の将棋を見にきたいなあ。特に駒とか盤とかを。

それにしてもコンピュータが将棋を指す時代が来るなんて、昔の人はおろか、10年前の私が聞いても「……?」って思うだろうにや。いやまあその時はまだ10歳なんですが。

負けられぬただ負けられぬ電脳に向かい駒は淡々となる (なしも)

…なしも「ん」になったのに、特に意味はありません。

ただなんとなく、くまモンみたいでいいなって思っ(嘘)。

さて、最後は前回の駒zoneに掲載されていた、浮島さんの将棋短歌を読みます。

閉じられたガラスの水槽いつ夜は僕を囲ってしまったんだろう (浮島)

アロワナの気持ちをすれば穴熊も熱帯雨林の夢を見ている (同)

「囲う」「穴熊」というワードをもとに詠んだ歌(ですよね)。あえてカテゴライズしてみるなら、これらは「将棋用語から着想を得て詠んだもの」です。

「囲う」「閉じる」「水槽」「夜」が、なんともいえない恐怖感と息苦しさ、そして孤独を感じさせます。

てか、アロワナって熱帯魚なのか。(初めて知った)そして古代魚なのか。

そういえばハイギョも昔からいますよね。夏眠するそうで…うらやましいな

こうやって通して読んでみても、浮島さんの歌は実に感覚的です。

そしてその感覚は、決して空想的なものではありません。たしかに「肉感的」で、ときには生々しくさえあります。

ヒトの精神のやわらかく敏感な部分にすつとメスを入れるような、鋭い歌。

「将棋短歌」というジャンルは実に範囲が広く、そこがいいところだと私は思っています。

将棋と短歌の関わり方はきわめて自由であるべきだからです。

将棋に対するさまざまな感情を三十一文字の形式にまとめただけのも、正統な歌として詠まれた中に将棋の要素がそれとなくちりばめられたものも、あるいはその中間のものも、すべてがれつきとした将棋短歌です。

将棋を勉強することで、さらに世界が広がるんだろうな。うむ、これからがんばろうかな。

な、なんかまとまってしまった…ッ。しかも大概偉そうなことばかり書いてしまった。

ホントに些細なきっかけから今回歌評(だったのか?)を書かせてもらうことになったのですが、すごかったのしかったです。書き進めるなかで、自分が考えていることがはつきりわかってくるものですね。

自分の考えをうまく表すのメツチャ難しかったです。(こなみかん)

こんな思ったことばっか書かせてもらえたの、いつ以来でしようかね…。  
そして、これを書き上げるまでに食べたたこ焼きの数は計り知れませんが、

ありがとうございます。おいしかったよたこ焼き。

最後になりましたが、「浮島さんの歌について書かせてください！」と突飛なお願いをしたにもかかわらず快くオッケーをくださった浮島さん、ありがとうございます。自分なりに浮島さんの歌にラブレターを書いたつもりです。果たして思いは伝わるのか?乞うご期待!

また機会があったらやりたいです。今度は私も短歌詠んでみようかな

さいごのさいごに、私の大好きな浮島さんの歌を一首。

直線の夏、隆々と肩いかる雲、正眼の抜き身たる俺

(浮島)

「ツクモさん、対談です！」

贅楽夢

「ネタが思いつかないから月萌さんと対談してよ」

そんな「沼メッセ」が送られて来たのは、関東地方が梅雨入りして三日目のことだった。送り主は、贅楽夢という、三次元空間における実在が怪しまれている謎のツイッター民であり、らくは (@rakha) さん主催の将棋文芸誌「駒 zone」の参加メンバーの一人でもあった。

「……ああ、ぜいらむさんですか。七月に『駒 zone』発行するから何か書けっらくはさんから指令が来たらいいんですが、もう何年も書いてないので文章を書く勘が鈍ってるらしいですよ。わたしたちに対談させて、それを記事にしようという浅薄な魂胆ですね」

開けっ放しの襖の向こうから月萌の声が届いた。かの巫女は今、隣の部屋で部屋の広さに比して巨大過ぎる神棚を祓い清めている最中だった。『駒 zone vol.13』で颯爽と(?)初登場した時の月萌はと言えば、神社ではなく禅寺で暮らしていたものだったが、紆余曲折を経て今では何故かマンションの一室で神棚を祀っているのだから、変われば変わるものというか、それとも、ようやく巫女らしくなったというべきか。

まあ、ここで神棚を祀らなくてはならなくなった事情というのも、半分以上は僕の責任なのだが。

ところで我が家の神棚は「三社造」と呼ばれるかなり立派なもので、それには扉が三つあり、それぞれ「天照大御神」「地元の氏神様」「個人的に崇敬している神様」の神札おふだを収めることになっている。ちなみに「崇敬する神様」の所には、我が家では何故か美少女フィギュアが週替りで鎮座しているのだが、どんな神様が依り憑いているのかよくわからない。月萌によれば、それは僕を守護する某かの神使らしいのだが、多分それは嘘だろう。何しろあの巫女は息を吸って吐くように嘘をつく。月萌が登場する駒 zone のバックナンバーが何よりの証拠なので未読の方

はぜひ手に取って確かめていただきたい。

そう言えば確かに『紙の駒 zone』で三人の作者によるシェアードワールド企画を発表以降、贅楽夢氏の新作が出ていない。いったいどうしてしまったのだろうか? ……飽きたのかな? 飽きたんだろうなあ。

「それがですね、先日ぜいらむさんにどうして続編書かないのかとメールでお尋ねしてみたのですが……」

「何て言ってた?」

「就職が決まって髪を切ってきた。もう若くないから……って言い訳してました!」

「確かに言い訳がましいな!」

まずそのセリフからしてフザケている。しかも元ネタが何となくわかるだけにむしろムカつく。

「まあ、ぜいらむさんが小説を書くのが書くまいが、わたしたちの世界では時間が経過していきるので物語は進んでるんですけどね」

そうは言っても、発表されない物語など単なる妄想である。存在しないに等しい。Google の検索結果の五十ページ目以降と同じくらい、まるで意味がない。

「こちらの世界では『紙駒』以降もいろいろと血生臭い事件が頻発しているのですが」

「うん、確かに危なっかしい事件ばっかだったよな。半分以上は『紅の斧』の仕業だけだ」  
アックストルネード

月萌の『紅の斧』には命を奪われかけたり (vol.3) 逆に命を助けられたり (vol.6) 紙の駒 zone と、波瀾万丈な経緯がある。人に歴史あり、だ。それに、まさか僕が今では三階建の一軒家を建てているだなんて、駒 zone 読者は誰も知らない。

「懸さん、地の文でさらっと嘘を吐かないでください。ここは築十五年のマンションの角部屋 3DK バス・トイレ・インターネット付です」

一軒家に比べて何だか格が下がった感じだが、ここは中々快適でいい部屋なのだ。なお、家賃はもはや価格破壊レベルに安い。勿論ワケあり物件だが、その辺りは今後続編として発表されるかもしれないので今は

まだ内緒しておく。

「それにしても……『駒・zone』って今何号だっけ？」  
呟きながらネットでごくぐぐってみる。

……駒・zone.com (http://komazone.com.seesaa.net/)

……r-borders (http://rakuha.web.fc2.com/)

……バブー (http://p.booklog.jp/users/rakuhaha)

……駒・zone-Google+ (https://plus.google.com/117906010282503911031/posts)

サイトがいろいろあるなあ。

「いろいろあるというか、とっちらかってますよね。一体どれが公式なんでしょうか？」

「とっちらかっているとかなうな！」

一つの情報に対するアクセスポイントを複数持たせておくというのは成果物の視認性を上げるには効果的なんだとか、そんなことを贅楽夢氏から聞いたことがある。らくは編集長は研究者の顔も持っているの、そうしたことに敏感なのだろう、と。僕は中卒なのでその辺のことはさっぱり意味が判らないのだが。しかも

駒zone通信 (http://www.mag2.com/m/0001388590.html) もあるし

Dlmarket (http://www.dlmarket.jp/manufacture/index.php?consignors\_id=9885) にも置いてある。

広報担当・月子ちゃん (@tsukiko\_sann) のツイキャス (http://twitcasting.tv/tsukiko\_sann) なんてものまであるし。ツイキャスとえば、駒・zone執筆陣の一人、ロリコン紳士・しむしむ (@ShimShim87) も駒・zone企画をやっていた (http://twitcasting.tv/shimshim87)。

「いやーVOL.10に至るまでにホントにいろいろやってるなあ」

らくはさんのことだから企画段階でボツになったインターネットサイトや広報紙等は、他にもたくさんあったのではないかという気がするし、ペーパーにして町内会の閲覧板で回っていた可能性も考えられる。

「まあ何にせよ、ひっそりと始めた『将棋ファン』による将棋文芸誌の試み』が、こうしてずっと続いてきたのは、素晴らしいことですよ」

と、月萌がらしくもなく——つまり、毒舌を吐くのではなく普通に駒zoneを褒めていた。確かに彼女の言うとおりではあった。贅楽夢氏がいつか言っていた。「駒・zoneがなければ、創作をする楽しみと苦しみを体験しない人生をずっと送るところだった。あの得難い体験が出来たことは、自分の大切な宝物だ」と。

「さて。神棚とお部屋の清掃も終わりましたし、せっかくですから『駒zone vol10』の発行を祝しまして——。」

「祝しまして？」

「神楽を舞います！」

「舞うって……。いや、対談はどうするんだよ……」

これではまるで記事にならない。せいらむたん、原稿落として編集長に怒られるんじゃないかな？ カナディアン・バックブリーカーで背骨をへし折られるくらいのお仕置きは覚悟しておいた方がいいかもしれない。という僕の心配をよそに、いつの間にか隣りの五畳間の和室では既に月萌が準備を終えていて、今まさに舞を始めようというところだった。相変わらず手際が良い。彼女は大笑つきの上にかなりタチの悪い悪霊だけど、仕事は早い子なのだった。

すっ——と、初まりの足拍子が出る。厳かで滑らかな所作だった。

透き通るような白衣に緋の袴。緑色の鶴が象られた千早ちはや。扇が弧を描き、周囲には陽炎が揺らめく。

かの大橋分家に関係する出自の者であるという巫女装束に身を包んだ少女が、舞い、そして、謡う——。

千早振る 神の岩戸に入給へば、

八百万の神達 つどひに 神集ひ、

祈るべきをはかり先、

常世の鳥を あつめてなかしむる 常世や、

かけると鳴きぬ おきよ おきよ 我門よ

妻人もこそ見れ たんと啼つる 常世や

……詳しいことはわからないし、きつと駒zoneとは何の関係もないのだろうし、そもそも月萌自身もその意味を理解していないという気がするけれど、彼女の謡う神楽歌は、しん、と心に染み入るようで、確かにそれは「駒zone」を寿ぐ歌なのだと感じらるのだった。

将棋ファンを繋ぎ、文芸ファンを引き逢わせ、創作の連鎖を広げ、プロの将棋界にもその存在を知られるまでになつて。そうして、ゆるりゆるりと人と人との絆を紡いで。

そんな『駒zone』のあるこの世界は素晴らしい、と、……うかつにも月萌の舞に見惚れてしまいなから。

——そして僕はこう思ったのだった。

「らくはさん、駒zoneに出会わせてくれて、ありがとう」

平成二十七年六月某日。駒zone VOL.10を祝して by 贅楽夢

あとがき

皆様、お久しぶりです。ついに、十号になりました。

色々なことがありましたが、マイペースで今号も発行することができました。多くの方のご協力あつてのことです。ありがとうございました。

今号はコラボ企画が多く、いつもとは違う感じになりました。とはいえやはり「自由に楽しむ」というところも大事にできたかなあ、と。

最近考えるのは、「波の後」です。将棋を取り巻く環境は随分と変わり、将棋を題材にした作品も増えました。それはうれしいことではあるのですが、やはり数が多くなれば当たり外れも出てきます。将棋がテーマというだけでは目立ってなくなってきました。いつか大きな波は去り、穏やかな時期がやってくると思います。

そんなときも、『駒 zone』は変わらずにやっつけていければいいかな、と思うのです。人々が関心をなくせば、創作者もあまり将棋を取り扱わなくなるでしょう。それでも、将棋や文芸自体の魅力が変わるわけではありません。ブームが去った後も堂々と「やっぱり将棋文芸って楽しいよね！」と言っていたい、と思います。

最近、ある新しい将棋アプリで将棋を指すことが多いのですが、そこで驚くべきことがあります。初手で投了したり接続を切る人がそこそこいるんですね。多くの場合、レーティング差が大きすぎるため、ほとんど点数移動がありません。対局数が少ない場合などは、負けてもレーティングが上がります。勝てそうにない相手との対局は避け、勝てそうな相手との対局に集中しようということなのでしょうね。そういう人にとっては、レーティングを上げることが目的であり、将棋はそのための手段なわけです。そのような人でさえ将棋を楽しむという時代が来たのは、ある意味画期的なのかもしれません。

将棋の楽しみ方はどんどん多様化していくのだと思います。その中に、書くこと、読むこと、想像すること、そんなことが含まれ続けていけばいいな、と思います。

では、十一号も頑張って作っていききたいと思いますので、またよろし

くお願いいたします。

編集長 清水らくは

追伸 次号では月子さんや辻村君にも活躍させてあげたいです……

執筆

浮島

欠片食器

駒込さやか

駒野尊徳

斉藤将吉

ジェームズ・千駄ヶ谷

清水らくは(落波)

しむしむ

贅楽夢

副島玲美

どつともつと

なしもん

跳馬

堀まり慧

イラスト

若葉

編集 清水らくは

広報 金本月子(@tsukiko\_sann)

営業 皆川許心(@MinagawaMotomi)

駒・zone vol.10

発行 無責任・zone

発行日 二〇一五年七月二十日

HP <http://komazonecom.seesaa.net>